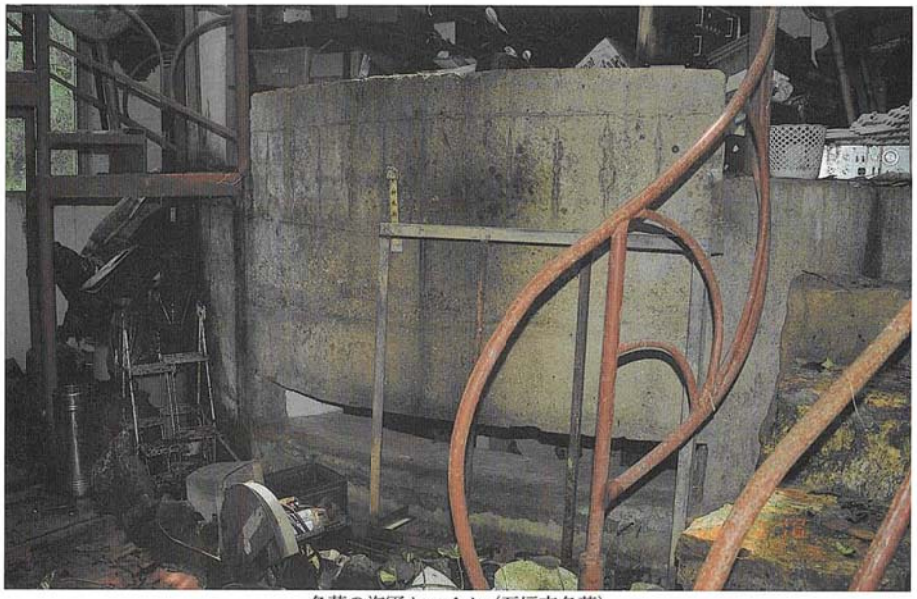
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第41集

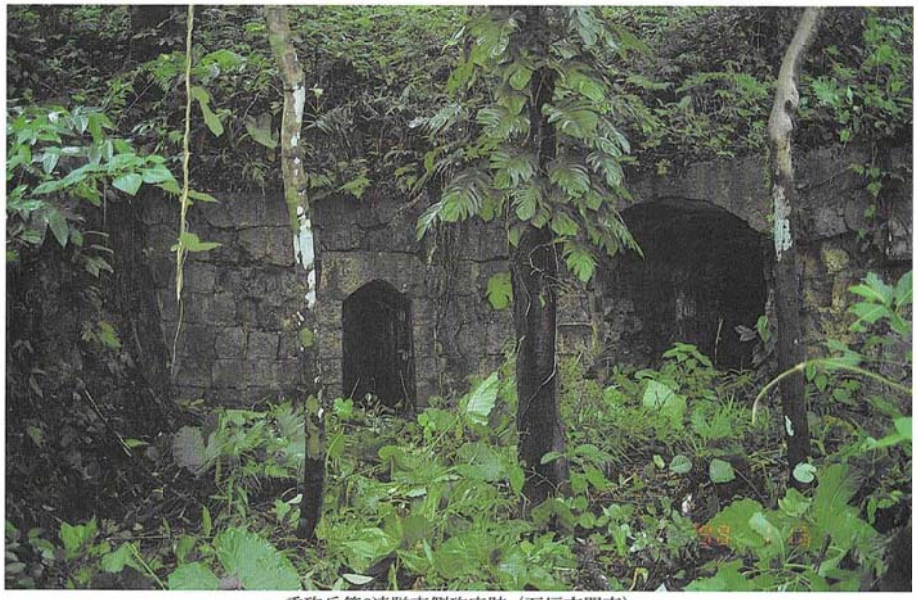
沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(VI)

― 八重山諸島編 ―

2006年（平成18）3月
沖縄県立埋蔵文化財センター



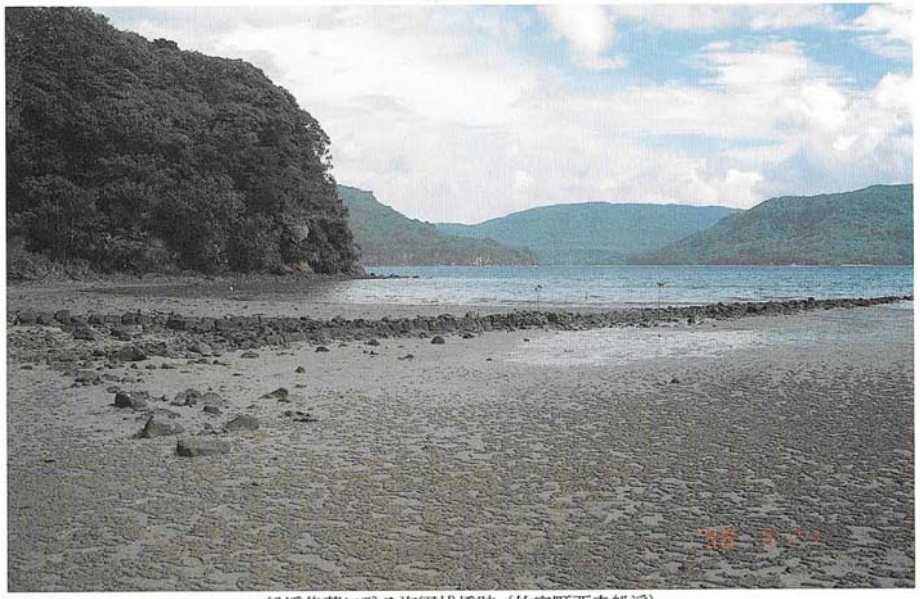
名蔵の海軍トーチカ（石垣市名蔵）



重砲兵第8連隊東側砲座跡（石垣市開南）

巻頭図版 1

於茂登岳東側の戦争遺跡群（石垣市於茂登）



船浮集落に残る海軍桟橋跡（竹富町西表船浮）

金田家の壕（竹富町西表祖納）

船浮要塞の壕（竹富町外離島）

カマヌタの壕（与那国町祖納）

平喜名飛行場跡の電波探知機壕（石垣市真栄里）

例　言

1　本報告書は、平成16～17年度に実施した戦争遺跡詳細分布調査（八重山諸島地区）の成果を収録したものである。

2　本事業は、文化庁からの補助を受け、沖縄県教育委員会が行ったものである。調査は県立埋蔵文化財センターが主体となって実施した。

3　執筆者は次のとおりである。また、編集作業は山本正昭・伊波直樹を中心に又吉純子他の協力を得て行った。

山本正昭　第１章、第４章第１節14、17、19、25、26、第３節８、第５章
伊波直樹　第２章、第３章、第４章第１節１～24、第２節、第３節１～７

4　本報告書に使用した地形図は、国土地理院（平成15年４月１日）発行の1／25,000を複製、使用した。

5　附図（遺跡分布図）には、踏査で確認されている戦争に関連する戦前期の記念碑等も戦争遺跡としてプロットした。

6　本調査において、八重山諸島地区各市町教育委員会、地域史協議会機関及び関係者等の協力のもと、円滑な調査を実施することができた。特に記して感謝を申し上げます。

7　本調査で得られた実測図、写真などの資料はすべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管してある。

8　本報告書第４章の各遺跡の種別と形態は次のとおりである。

種別：住民避難、陣地、記念碑等、砲台、トーチカ、交通関係、監視哨、秘匿壕、機関銃壕、掩体壕、兵舎、政治・行政、不明、その他
形態：自然壕、人工壕、構築物、建造物、碑銘、不明、その他

※本報告書では、主として軍事目的に建築または土木工事を行った構造物を構築物とし、軍事目的以外のものを建造物とした。

序

本報告書は文化庁から国庫補助を受けた沖縄県戦争遺跡詳細分布調査のうち、平成16年～17年度に実施した八重山諸島地区における成果をまとめたものであります。

本県は去る沖縄戦において県内各地で多くの一般市民を巻き込んだ激しい戦闘が展開され多数の尊い命や財産が奪われました。沖縄諸島及び宮古・八重山諸島の島々には、この戦争に関連した多くの構造物や遺構などが残されています。

平成10年度より開始された戦争遺跡詳細分布調査はこれまで「南部編」、「中部編」、「北部編」、「那覇市及び周辺離島編」、「宮古諸島編」と5冊の報告書が刊行されており、本報告書刊行をもって本事業は終了します。

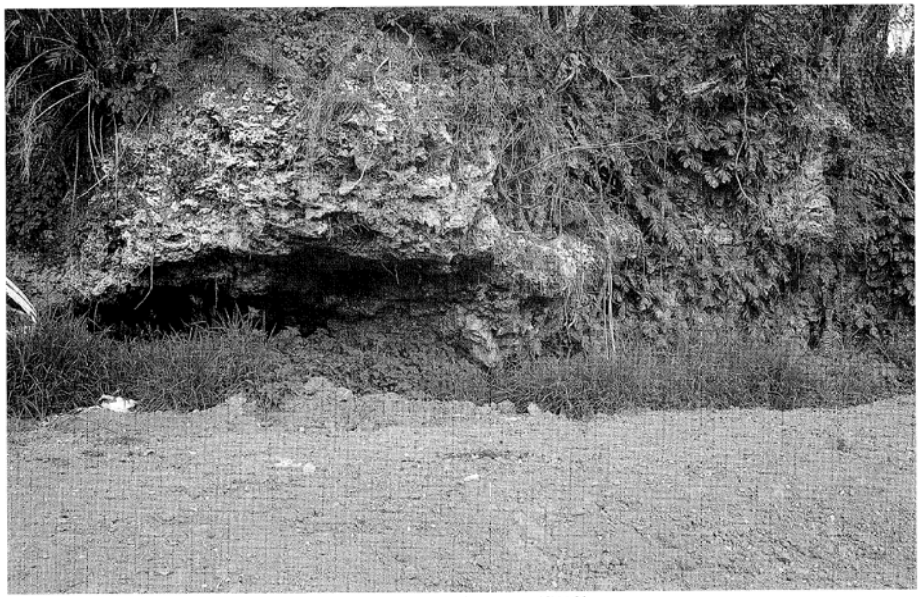
本事業7年間に蓄積された詳細分布調査の成果は、戦争遺跡の史跡指定に向けた基礎資料として活用されていくとともに、戦争遺跡を地域の文化財として保存検討するための資料として、諸開発事業との協議調整や地域学習における歴史・平和教育としての教材として役立つものと考えています。

本報告書が文化財保護思想の普及啓発や地域文化財への関心、並びに沖縄県の歴史に対する理解と認識を深めるために、多方面に御活用いただければ幸いに存じます。

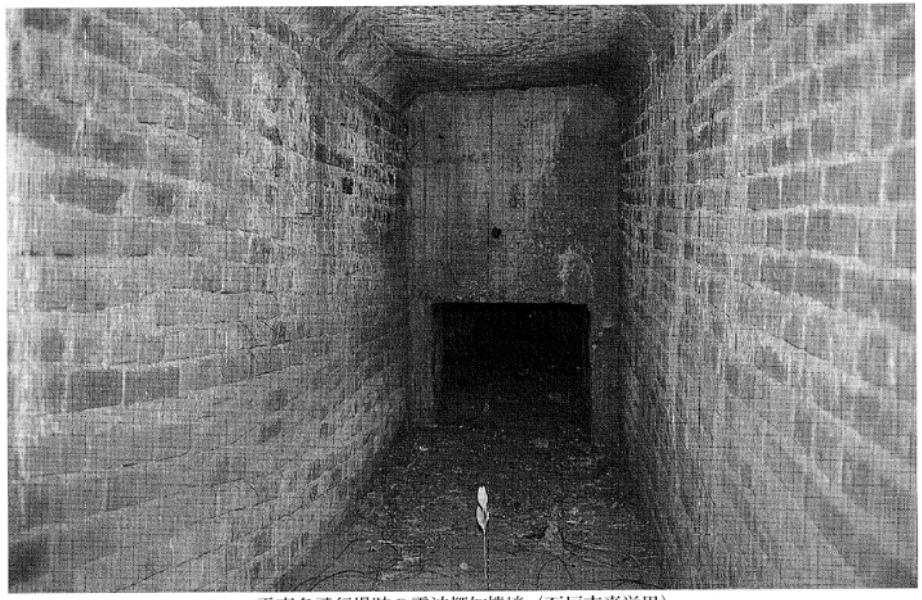
末尾になりましたが、今回の調査およびこれまでの沖縄県戦争遺跡詳細分布調査において現地調査並びに報告書作成にあたり、多大なる御指導御協力を賜りました文化庁をはじめ、関係市町村教育委員会などの各位に対して深く感謝申し上げます。

2006年（平成18）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　田　場　清　志



カマヌタの壕（与那国町祖納）



平喜名飛行場跡の電波探知機壕（石垣市真栄里）

例　言

1　本報告書は、平成16～17年度に実施した戦争遺跡詳細分布調査（八重山諸島地区）の成果を収録したものである。

2　本事業は、文化庁からの補助を受け、沖縄県教育委員会が行ったものである。調査は県立埋蔵文化財センターが主体となって実施した。

3　執筆者は次のとおりである。また、編集作業は山本正昭・伊波直樹を中心に又吉純子他の協力を得て行った。

山本正昭　第１章、第４章第１節14、17、19、25、26、第３節８、第５章
伊波直樹　第２章、第３章、第４章第１節１～24、第２節、第３節１～７

4　本報告書に使用した地形図は、国土地理院（平成15年４月１日）発行の1／25,000を複製、使用した。

5　附図（遺跡分布図）には、踏査で確認されている戦争に関連する戦前期の記念碑等も戦争遺跡としてプロットした。

6　本調査において、八重山諸島地区各市町教育委員会、地域史協議会機関及び関係者等の協力のもと、円滑な調査を実施することができた。特に記して感謝を申し上げます。

7　本調査で得られた実測図、写真などの資料はすべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管してある。

8　本報告書第４章の各遺跡の種別と形態は次のとおりである。

種別：住民避難、陣地、記念碑等、砲台、トーチカ、交通関係、監視哨、秘匿壕、機関銃壕、掩体壕、兵舎、政治・行政、不明、その他
形態：自然壕、人工壕、構築物、建造物、碑銘、不明、その他

※本報告書では、主として軍事目的に建築または土木工事を行った構造物を構築物とし、軍事目的以外のものを建造物とした。

目　次

序
巻頭図版
例言

第１章　調査の概要……1
　第１節　調査体制……1
　第２節　調査経過……3

第２章　地理的・歴史的環境……4
　第１節　地理的環境……4
　第２節　歴史的環境……7

第３章　八重山諸島の沖縄戦……9
　第１節　八重山諸島の戦時体制作り……9
　第２節　八重山諸島の沖縄戦の展開……11
　第３節　八重山諸島の沖縄戦の特徴……11

第４章　各市町村における戦争遺跡……13
　第１節　石垣市
　1．フルスト原の海軍壕群……17
　2．宮良の特攻艇秘匿壕群……21
　3．地城御嶽の壕……24
　4．シイ原の壕……26
　5．大浜の掩体壕……28
　6．平久保崎の海軍特設見張所跡……30
　7．川平湾の特攻艇秘匿壕群……32
　8．於茂登前山の高射砲砲座跡と弾薬庫壕……35
　9．伊野田半島の壕……38
　10．白保与那原の壕……40
　11．名蔵の海軍トーチカ……42
　12．石垣氏宅の避難壕……43
　13．仲間岡の壕……45
　14．平喜名飛行場跡の電波探知機壕……46
　15．宮良牧中の避難壕……48
　16．伊原間のサビチ洞……49
　17．白水の戦争遺跡群……50
　18．石垣島地方気象台の弾痕跡……53
　19．於茂登岳の戦争遺跡群……55
　20．登野城小学校の奉安殿……60
　21．崎枝の電信屋……62
　22．前勢岳南麓の砲台跡……64
　23．大浜ナーカーラの壕……65
　24．バンナ岳の戦争遺跡群……67
　25．前勢岳の壕・塹壕……70
　26．ヘーギナー壕・三連結壕……72
　第２節　竹富町
　1．竹富島南海岸の銃眼……76
　2．ヤンガー……78
　3．ティラクガマ……78
　8．アールムティの特攻艇秘匿壕……80
　9．インメーアボー……83
　10．ニシヌハマの壕……83
　11．東筋の避難壕……86
　12．仲本の避難壕……86
　13．ニスヌガマ……89
　14．ゲーツヌアブ……89
　15．フツァーミアブ……90
　17．北集落の避難壕……92
　18．キッパリヤマの壕……92
　19．アンヌカー……94
　20．パチンガカー……95
　21．大原のフサトゥルバー……96
　22．古見の避難壕……97
　23．船浦の避難壕・ヒナイ崎の壕……98
　24．上原の避難壕……98
　25．干立集落入口の壕……100
　27．金田家の壕……102
　28．松山家の壕……104
　29．白浜の避難壕……106
　30．船浮の避難壕……108
　31．船浮の戦争遺跡群……109
　32．南風見田の忘勿石……115

船浮要塞戦争遺跡群……116
　内離島（第１区）①内離島砲台跡、②陸軍病院跡、③船浮要塞司令部跡、④慰安所跡……118
　祖納半島（第２区）⑤祖納砲台跡……121
　外離島（第３区）⑥軍避難壕、⑦外離島砲台跡、⑧擬砲跡・塹壕・避難壕……123
　　⑨・⑩兵舎跡、⑪小野隊兵舎跡、⑫防空壕……124
　サバ崎（第４区）⑬擬砲跡、⑭桟橋跡、⑮兵舎跡……128

第３節　与那国町
　1．田原川の壕……132
　2．カマヌタ……132
　3．ブナビダヤ……133
　4．クブラバルダヤ……133
　5．桃原の避難壕……134
　6．比川の避難壕……134
　7．潮原の陸軍兵舎跡……138
　8．伊波南哲詩碑……139

第５章　結語……140

図目次

第１図　八重山諸島の地質図（角川書店1986）……5
第２図　琉球列島の位置……6
第３図　調査対象位置図……7
第４図　フルスト原の海軍壕群分布図……18
第５図　弾薬庫壕分布図……18
第６図　壕平面図及び断面図……19
第７図　壕平面図及び断面図……19
第８図　宮良の特攻艇秘匿壕群分布図……22
第９図　壕平面図及び断面図……23
第10図　地城御嶽の壕平面図・断面図……24
第11図　壕平面図……27
第12図　監視哨跡平面図及び断面図……31
第13図　川平湾の特攻艇秘匿壕群分布図……33
第14図　壕平面図……33
第15図　砲台跡と弾薬庫壕平面図及び断面図……36
第16図　壕平面図……38
第17図　白保与那原壕の平面図……40
第18図　壕平面図及び断面図……46
第19図　白水の戦争遺跡群配置図及び大川住民避難壕・タコ壷群配置図……51
第20図　左：御真影壕、右：八重山支庁壕……51
第21図　於茂登岳東麓の戦争遺跡群配置図……56
第22図　壕平面図……56
第23図　壕平面図……57
第24図　壕平面図……57

第25図　通信隊基地跡平面図 …… 58
第26図　登野城小学校の奉安殿〔『沖縄県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書』より再トレース〕 …… 61
第27図　大浜ナーカーラの壕 …… 66
第28図　バンナ岳の戦争遺跡群配置図 …… 68
第29図　③タコ壺・塹壕群平面図 …… 69
第30図　前勢岳の壕・塹壕 …… 71
第31図　三連結壕の平面図及び断面図（『八重山の戦争』より再トレース） …… 73
第32図　銃眼③内部平面図 …… 76
第33図　竹富島南海岸の銃眼配置図 …… 77
第34図　アールムティの特攻艇秘匿壕平面図・断面図 …… 81
第35図　干立集落入口の壕平面図・断面図 …… 100
第36図　金田家の壕平面図 …… 103
第37図　船浮の戦争遺跡群配置図 …… 110
第38図　防空壕の平面図・断面図 …… 111
第39図　発電機壕 …… 112
第40図　特攻艇秘匿壕 …… 112
第41図　弾薬庫壕 …… 112
第42図　船浮要塞配置図 …… 117
第43図　内離島砲台跡 …… 119
第44図　祖納砲台跡 …… 121

表目次

第１表　八重山諸島地区の人口・世帯数・面積 …… 4
第２表　八重山地区駐屯部隊 …… 10
第３表　石垣島住民のマラリア死亡状況 …… 12
第４表　竹富村外島住民のマラリア死亡状況 …… 12
第５表　八重山諸島地区の戦争遺跡表 …… 14
第６表　八重山諸島地区の戦争遺跡表 …… 15

第１章　調査の概要

第１節　調査体制

現地調査（平成16年度）から資料整理及び報告書の刊行（平成17年度）まで、下記の体制で実施した。また、八重山地域の各市町教育委員会、沖縄・八重山文化研究会及び関係者からの協力を随時得ることができた。

a 2004年度（平成16）の調査体制

事業主体・・・沖縄県教育委員会
教育長　山内　彰
県教育庁文化課課長　名嘉政修
〃　課長補佐　上地泰順、千木良芳範
〃　記念物係長　島袋　洋
〃　〃　専門員　中山　晋
調査主体・・・沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　安里嗣淳
調査事務
副所長兼庶務課課長　赤嶺正幸
庶務課主任　比嘉美佐子
〃　主事　西江幸枝
調査総括
調査課課長　盛本　勲
調査員
専門員　山本正昭
調査補助員
文化財調査嘱託員　伊波直樹、崎原恒寿、喜多亮輔、岸本竹美、仲宗根瑞香、宮城奈緒

b 2005年度（平成17）の調査体制

事業主体・・・沖縄県教育委員会
教育長　仲宗根用英
県教育庁文化課課長　千木良芳範
〃　課長補佐　島袋　洋、崎浜文秀
〃　記念物係長　盛本　勲
〃　〃　専門員　中山　晋
調査主体・・・沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　田場清志
調査事務
副所長兼庶務課課長　赤嶺正幸
庶務課主任　比嘉美佐子
庶務課主事　山田恵美子

調査総括

調査課課長　　岸本義彦

調査員

調査課専門員　　山本正昭、伊波直樹（臨任）

調査補助員　　喜多亮輔、久貝弥嗣

c 調査指導及び調査協力

城間良昭	沖縄県平和祈念資料館主査
大田静男	石垣市教育委員会文化課課長
下地　傑	〃　文化財係長
山口栄一	〃　主事
下野栄高	〃　主事
松島昭司	〃　総務課課長
石垣實佳	石垣市立八重山博物館館長補佐
遅事孝作	竹富町町史編集室係長
仲盛　敦	竹富町教育委員会生涯学習課主事
東小浜功尚	与那国町教育委員会総務課課長
長濱利典	〃　教育課文化財係
斉藤三行	独立行政法人国際農林水産業研究センター沖縄支所庶務課課長
大賀高生	〃　庶務課会計係長
立津元信	石垣島地方気象台総務課課長
崎原　毅	南島民俗資料館館長
島仲信良	新城公民館館長
石垣金星	沖縄県文化財保護指導員
渡口政春	竹富町立船浮小学校教頭
嘉手苅徹	沖縄県文化振興会公文書管理部 史料編纂室
霧生藤吉郎	宮古島慰霊碑保存会会長
石垣久雄	石垣市文化協会事務局長

d 聞き取り調査協力者

大浜敏夫	沖縄県教職員組合八重山支部書記長
宮喜きよ	竹富町黒島在住
池間　苗	与那国民俗資料館館長
池田信子	竹富町西表大原在住
池田豊吉	船浮西表館館長
粟野ユリ	竹富町西表祖納在住
渡真利志保子	竹富町西表上原在住
田底　敏	石垣市平得在住
小濱勝義	八重山文化研究会会員
久田友明	沖縄・八重山文化協会会員

資料整理作業員（五十音順）

池原直美、佐藤明美、新垣ますみ、宮城理恵子、與古田愛

資料整理作業協力者（五十音順）

新垣利津代、上原美穂子、大村由美子、荻堂さやか、久保田有美、国場のりえ
崎原美智子、平良貴子、比嘉孝子、比嘉登美子、譜久村泰子、又吉純子

第２節　調査経過

今回の分布調査は、1998年度から開始された本事業のうち、八重山諸島地区３市町を調査対象にしたものである。2004年度に遺跡の分布状況やその範囲確認を行うため、表面踏査を主体に実測調査、聞き取り調査などを行い、2005年度にその資料整理及び補足調査を実施した。年度ごとの概要は以下のとおりである。

－2004年度（平成16）－

これまで八重山諸島地区については、体系的な戦争遺跡数についての把握がなされていなかったことから、各市町教育委員会を経由して各字自治会に戦争遺跡に関するアンケートを送付した。

それらの回答及び事前に当センターが把握していた遺跡情報をもとに、５，６月に石垣島、西表島、９～12月に先の２島と周辺離島の現地調査を行った。現地調査では戦争遺跡の所在確認、周辺遺跡分布図作製、遺構図作成、記録写真撮影、聞き取り調査を実施し、八重山諸島地区において約111ヶ所の戦争遺跡を確認することができた。

－2005年度（平成17）－

2004年度の調査成果の資料整理を行った。特に聞き取り調査を実施した戦争遺跡については、その内容を各市町教育委員会文化財担当課及び地域史担当者と共に現場確認を実施し、戦争遺跡の情報の補填を行った。特に必要な戦争遺跡についての遺構図測量、記録写真撮影を補足調査として２週間、実施した。

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

本報告書における調査対象地域である八重山諸島地区とは、八重山郡に属する３市町（石垣市・竹富町・与那国町）を指すものである。現行の行政区域において括ったひとつの調査対象区域であるが、各島により地理的環境が異なるため、ここでは石垣市（石垣島）、竹富町（竹富島・小浜島・黒島・新城島・波照間島・西表島・鳩間島）、与那国町（与那国島）で戦争遺跡の分布状況が確認できる島についての概要を述べることにする。

石垣島は沖縄本島那覇市の南西約410㎞に位置する周囲約160㎞の島であり、一島すべてが石垣市に属する。島の地形は、四角形状の主部を中心に北東に平久保半島が、北西に屋良部半島と川平半島がのびる。上記した諸半島と主部の中央北部、南西部は山地が分布し、最高点は中央北部の於茂登岳（525.8ｍ）で県内の最高標高である。地形的には山地・海岸段丘・低地の三つに大別される。地質的には全体的に見ると半島部を含む山地は火山岩類、海岸段丘・低地は第四紀更新世の琉球石灰岩と国頭層群からなる。段丘面ではサトウキビ畑・パイナップル畑・牧草地などに利用されている。人口の大部分が南部の市街地に集中しており、八重山諸島の政治・経済・交通の中心となっている。

竹富島は石垣島の南西約４㎞に位置する、周囲９㎞の低平な島で、東方にやや突出した楕円形状をなす。地質は第四紀更新世の琉球石灰岩が大部分を占めており、島の周囲は珊瑚礁が発達している。島の中央に集落が所在し、昔ながらの集落景観をとどめている。

小浜島は石垣島の西約15㎞に位置し、周囲16.5㎞の島である。地形は北西―南東方向にくびれのある主部と、その中間部から西に半島部がのびる。最高点は中央北部の大岳の99.2ｍである。島の地層は八重山諸島に分布する代表的な地層がすべて分布している。集落は中央部にある村内と半島部の先端にある細崎の２ヶ所で、南東部には島の面積のおよそ五分の一を占める広大なリゾート地がある。

黒島は石垣島の南西約16㎞に位置し、周囲12.6㎞の島である。南側を頂点とする三角状で、ほとんどが標高10ｍ以下の平坦な地形となっており、地質は第四紀更新世の琉球石灰岩からなっている。集落は島の北海岸、西海岸、中央部に５ヶ所所在している。昔から畜産業が盛んで、島の土地利用はほとんどが肉用牛の放牧場に利用されている。

新城島は黒島の南西４㎞に位置する、上地・下地二島の総称で、俗にパナリ（離れの意）ともいわれる。地形は北側の上地は周囲6.2㎞、最高点13ｍの長方形状、下地は周囲4.8㎞、最高点20.4ｍの楕円形状で、地質は二島とも第四紀更新世の琉球石灰岩からなっている。集落は上地が西海岸中部に所在し、下地は現在集落はなく島全体が肉用牛の放牧場となっている。

波照間島は石垣島の南西約51㎞に位置し、有人島としては日本最南端の島である。地形は東西に長軸をもつ楕円形をなし、周囲14.8㎞、最高点は波照間灯台がある中央部東寄りの59.5ｍで低平な地形であり、地質はほぼ全域が第四紀更新世の琉球石灰岩からなっている。集落は中央部西寄りに５ヶ所所在している。南十字星が見える島として知られ、1994年(平成６)には星空観察タワーが開設された。

第１表　八重山諸島地区の人口・世帯数・面積

市町村名	島名	人口(人)	世帯数(世帯)	面積(㎢)
石垣市	石垣島	46,702	19,741	222.85
竹富町	竹富町	343	172	5.42
	小浜島	553	299	7.82
	黒島	221	122	10.02
	新城島（上地）	5	5	1.76
	新城島（下地）	2	2	1.58
	波照間島	595	261	12.75
	鳩間島	65	39	0.96
	西表島	2,272	1,184	289.27
	竹富町計	4,056	2,084	344.01
与那国町	与那国島	1,755	758	28.84
八重山地区計		52,513	22,583	595.70

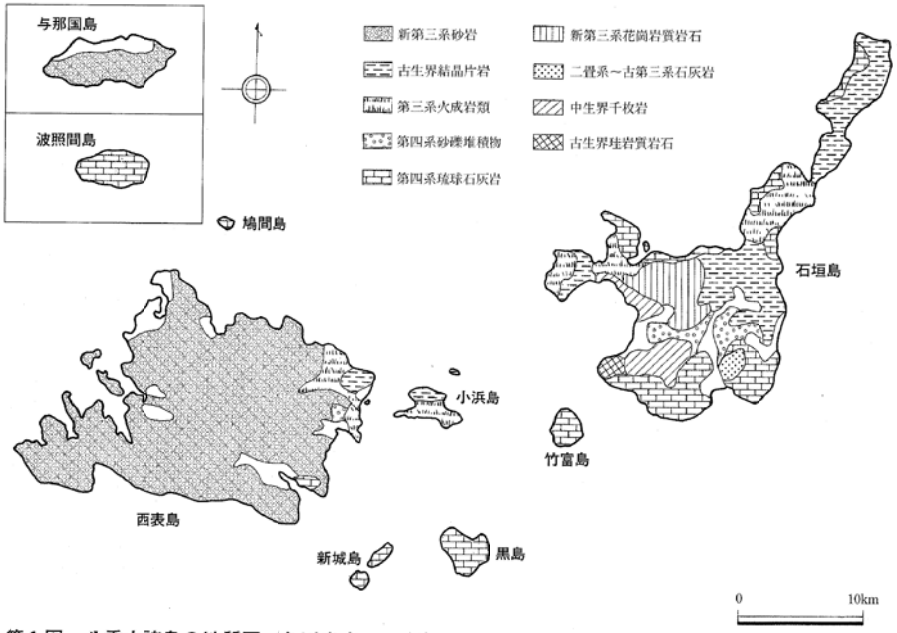
（注）人口及び世帯数については、県企画開発部総計課「沖縄県人口移動報告書」による

（注）面積については、国土交通省国土地理院「平成16年度全国都道府県市区町村別面積調」による

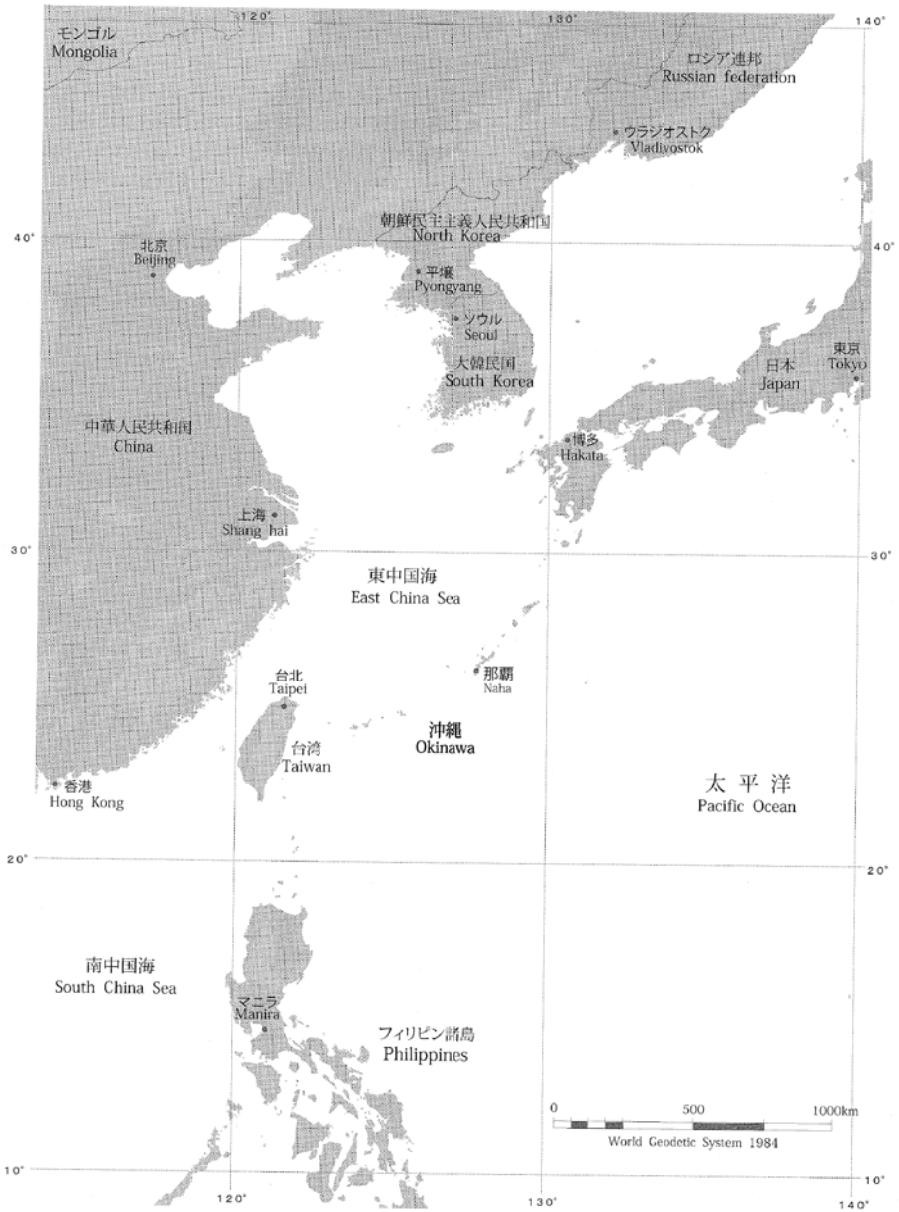
西表島は石垣島の西約20㎞に位置し、周囲約130㎞で県内では沖縄本島に次ぐ規模をもつ島である。地形的には島の大半を占める山地・海岸段丘・低地の三つに大別される。地質的には、山地は砂岩を主とする新第三紀中新世の八重山層群から、海岸段丘・低地は第四紀更新世の琉球石灰岩と国頭層群からなる。集落は海岸沿いに、島の南東部から西側にかけて散在している。島の大部分が亜熱帯のジャングルに覆われ、イリオモテヤマネコなど貴重な動植物が生息することから、国立公園にも指定されている。

鳩間島は西表島の北西約５㎞に位置する、周囲3.8㎞の低平な島である。地形は北西―南東方向に長軸をもつ楕円形状で、地質は第四紀更新世の琉球石灰岩が大部分を占めている。集落は南部にある鳩間のみで、近年過疎化が深刻な問題となっている。

与那国島は石垣島の西約130㎞に位置する、日本最西端の島で、一島で与那国町を構成する。地形は東西にのびた六角形状をなし、周囲約28㎞、最高点は中央やや東寄りにある宇良部岳の231.2ｍであり、丘陵・海岸段丘・低地に区分される。地質は砂岩と泥岩の互層からなる新第三紀中新世の八重山層群と、第四紀更新世の琉球石灰岩がほとんどである。集落は北側の祖納、西端に久部良、南側に比川の３集落で、祖納には町役場をはじめいくつかの公共機関がある。島の約110㎞西には台湾島があり、年に何度か気象条件のよい日に同島が見られる。



第１図　八重山諸島の地質図（角川書店 1986年）

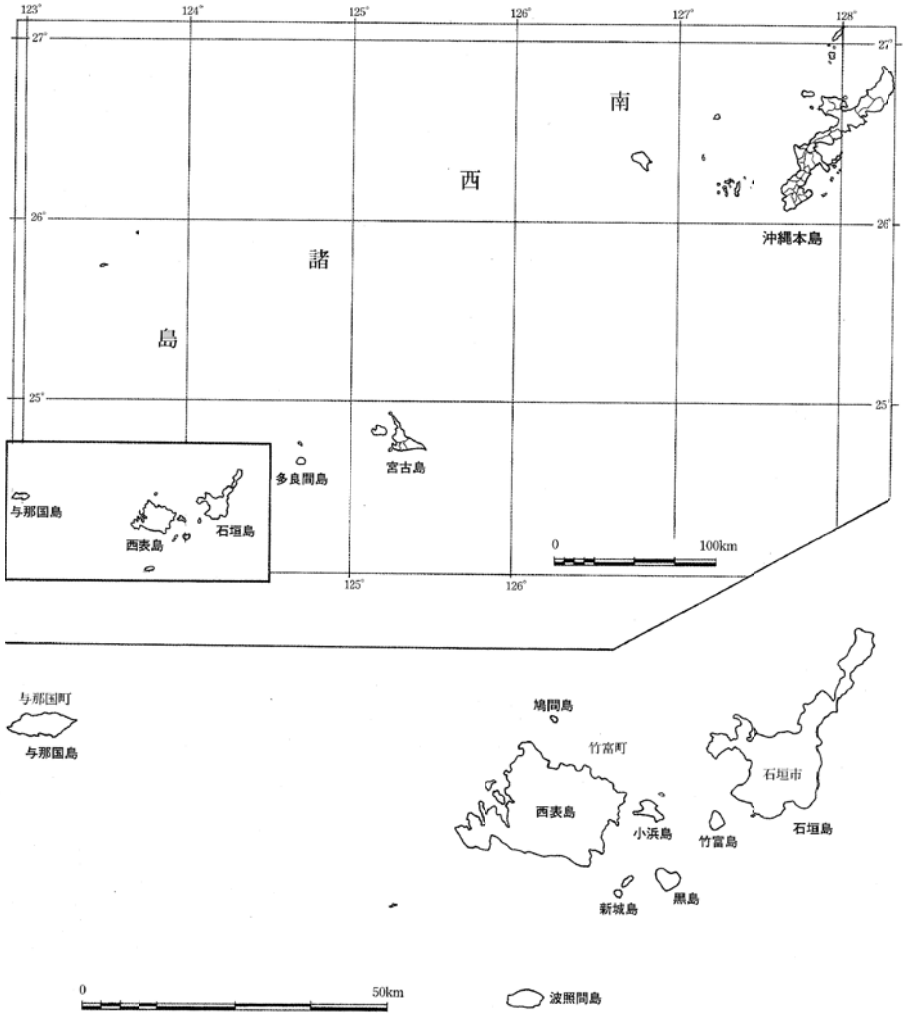


第２図　琉球列島の位置

第２節　歴史的環境

この節では本調査地区である八重山諸島地区を、先史時代から現代に至るまでの歴史的環境について述べることにする。なお、戦時中の状況においては、別項で述べることにする。

八重山諸島は北東に位置する宮古諸島を含むいわゆる先島諸島に属する。その歴史は先史時代において、南琉球圏と呼ばれ、本土の縄文・弥生文化の影響を受けている北琉球圏（奄美・沖縄諸島）とは異なり、台湾や東南アジアなど南方諸地域に影響を受けている文化ではないかと考えられている。このため現研究段階において、南琉球圏の時期区分は仮の先島編年が用いられ、前期・後期に区分される。先島先史時代



第３図　調査対象位置図

第２表　八重山地区駐屯部隊

部隊名	所属	部隊長(階級)	兵員数	到着日	駐屯区域
独立混成第45旅団司令部	陸軍	宮崎武之(少将)	255	1944.8.23	八重山農学校→於茂登岳
第128野戦飛行場設定隊	陸軍	山田新右衛門(少佐)	165	1944.6.11	白保飛行場
第69飛行場大隊	陸軍	浅沼紀平(少佐)	598	1944.8.3	白保飛行場
独立歩兵第271大隊	陸軍	宮田金吾(少佐)	570	1944.8.23	パンナ岳南麓
独立歩兵第298大隊	陸軍	毛木昭(少佐)	610	1944.9.14	宮良牧場
独立歩兵第299大隊	陸軍	高木清太郎(大尉)	613	1944.9.19	名蔵
独立歩兵第300大隊	陸軍	滝口武臣(大尉)	613	1944.9.14	於茂登岳
独立歩兵第301大隊	陸軍	阿部繁(大尉)	620	1944.9.14	川原
独立混成第45旅団工兵隊	陸軍	大藤芳久(大尉)	180	1944.9.14	開南
第506特設警備工兵隊	陸軍	高良鉄夫(大尉)	930	編入日 1944.9.16	白保飛行場
特設警備第226中隊	陸軍	又吉嘉英(中尉)	126	編入日 1944.3.22	シーナ
特設警備第227中隊	陸軍	三木義行(中尉)	126	編入日 1944.3.22	山田原
重砲兵第8連隊	陸軍	入野大二郎(中佐)	230	船浮要塞重砲兵連隊を1944.5.15改称、同年9.8石垣へ	西表船浮→石垣島
船浮陸軍病院	陸軍	池田勲二(軍医大尉)	23	編入日 1944.3.22	西表船浮→石垣島
第128師団第3野戦病院	陸軍	横井忠雄(軍医大尉)	180	編入日 1944.11.3	平得
独立自動車第284中隊第1小隊	陸軍	中川徹(中尉)	55	1944.8.23	白水
要塞建築勤務第8中隊第2小隊	陸軍	小野司一(少尉)	120	編入日 1944.3.22	石垣島
陸上勤務第109中隊	陸軍	田所正治(中尉)	175	編入日 1944.7.13	大川
特設水上勤務第101中隊	陸軍	山口亥三郎(中尉)	235		石垣
独立第4警戒隊	陸軍	柴田鎖(中尉)	55		
第4遊撃隊第4中隊	陸軍	今村武秋(少尉)	402		西表島
独立機関銃第19大隊	陸軍	小島誠(大尉)	324	1944.10	前勢岳南麓
特設第48機関砲隊	陸軍	桜井元三郎(大尉)	98	1944.11.4	平得飛行場
宮古島憲兵分隊の一部	陸軍	足立茂樹(少尉)	7		
船舶通信連隊第2大隊第2中隊	陸軍	道野四郎(少佐)	不明		
第28師団通信隊	陸軍	八木市蔵(大尉)	118		石中、大俣原
船舶工兵第23連隊第1中隊	陸軍	肥田木稔(少尉)	34		登野城
第32野戦貨物廠	陸軍	西尾盛正(主大尉)	24	編入日 1945.1.4	大川
石垣島海軍警備隊	海軍	井上乙彦(大佐)	1,800	1944.12	パンナ岳麓
第951空石垣島派遣隊	海軍	観音寺正(特中尉)	150		平喜名飛行場
第323設営隊	海軍	大森繁雄(主大尉)	550		平得飛行場
第165防空隊	海軍	佐々木拾次郎(特大尉)	不明		平得飛行場周辺
第19震洋隊	海軍	大河原茂美(大尉)	179	1944.12.11	川平湾
第23震洋隊	海軍	幕田稔(大尉)	184	1944.12.11	宮良
第26震洋隊	海軍	引野祐二(中尉)	不明	1945.1.20	小浜島
第38震洋隊	海軍	旅井理喜男(中尉)	不明	1945.1.18	宮良

(注) 本表は瀬名波栄著『石垣島防衛戦史』（1970年）及び石垣市史編集室著『市民の戦時・戦後体験記録　第２集』(1984年）に基づき作成した

(注) 表内の部隊長の氏名・階級は1945年(昭和20）４月１日当時のものである。

(注) 編入日は、第32軍隷下編入の大陸命の発令日を示す

第２節　八重山諸島の沖縄戦の展開

1944年（昭和19）10月10日、米軍艦載機によるいわゆる「十・十空襲」は南西諸島全域が空襲され、八重山諸島も例外ではなかった。石垣島では10月12日、初の空襲を受け、翌13日には与那国島の久部良集落が空襲により105戸が全半壊する被害を受けた。翌年の1945年（昭和20）には１月３日から３月末までに米軍機による空襲が約20回以上行われ、石垣島・与那国島が主な標的となった。その間、八重山旅団は「乙号戦備」（敵の空襲や砲撃の可能性がある場合の準備体制）を下命し、駐屯部隊は陣地の構築を加速させていった。また住民の防空壕（避難壕）づくりも本格化し、旅団が極秘に住民避難計画（主に石垣島は島内の山岳地帯へ、周辺離島は西表島への避難。その他に本土や台湾への疎開もあった）を作成するなど、いよいよ軍官民あげての戦闘体制となっていった。

３月26日、英国太平洋艦隊を加えての空襲が始まり、以後連日の空襲であった。空襲は飛行場・港湾・軍事施設だけでなく八重山諸島全域に及び、新城島や鳩間島などの小さな島にも空襲が行われた。５月になると空襲、艦砲射撃は激しさを増していき、第32軍が首里を放棄し南部に撤退した５月30日、宮古を含む先島守備隊は第32軍の指揮下から第10方面軍（台湾軍）の直轄となった。６月になると八重山旅団は敵の石垣島上陸を予想して同月10日、「甲号戦備」（敵の上陸攻撃の可能性がある場合の準備体制）を下命し、旅団司令部は於茂登岳に移動した。また、それに先立ち住民を石垣島では部落単位に指定した避難地に、竹富島・黒島・波照間島の住民は西表島へとそれぞれ強制避難させた。しかし、避難地先はマラリアの有病地帯であり、住民あるいは軍人も次々とマラリアに罹患した。さらに食糧難による栄養失調も加わり多数の死者を出すこととなった。空襲は６月までは連日続いたものの、７月には空襲は少なくなり、７月23日八重山旅団は甲号戦備を解除、８月には避難命令が解除され住民は避難地先から戻り始めた。

８月14日、第10方面軍より八重山旅団に終戦の内報が伝達され、翌日旅団司令部にて大隊長、部隊長を集め宮崎旅団長が詔書を奉読。９月７日、嘉手納の第10軍司令部前広場において、陸軍を代表して納見敏郎中将（師団長）が参加し、降伏調印書に署名、南西諸島における戦争は公式に終結した。10月６日には米軍海兵隊が石垣島に進駐し、日本軍の軍事施設を爆破、武器は接収され海中投棄された。11月からは本土より派遣された将兵の復員が始まり、翌年の1946年（昭和21）１月には復員事務が完了した。

八重山諸島における住民の戦死者は3,825人、その戦死原因で被弾死などの直接戦争による死者は178人で、残りはマラリアなどの戦病死が主となっている。

第３節　八重山諸島の沖縄戦の特徴

八重山諸島における沖縄戦の特徴を軍事作戦、住民避難の二つの側面にしぼって紹介する。

まず軍事作戦においてであるが、第32軍の想定では「敵が南西諸島に進攻する場合、その攻撃目標は沖縄本島が七分、宮古島三分」が当時の状況であり、石垣島は進攻目標に含まれないと見ていた。それを受けて防備兵力も宮古諸島の守備部隊が約３万人なのに対し、八重山諸島へは約１万人と戦略的な重要度に差があったのは明らかである。第32軍は先島に敵が上陸した際の防衛方針でも、イ・宮古島は原則として持久を主とするが、状況有利ならば上陸軍に攻勢をとる。ロ・石垣島は持久に専念し、努めて永く所在航空基地を敵に使用せしめぬよう努力する。としている。この防衛方針を基に宮古では水際作戦、即ち敵の上陸地点に兵力を集中し、一挙に敵を壊滅させる作戦をとり、水際陣地が多く作られたのに対し、石垣島では於茂登岳などの北方山岳地帯を利用し、遊撃戦を想定した複廓陣地が多く作られている。さらに総面積が宮古諸島の約2.6倍をもつ八重山諸島に約１万人の兵力で防衛することは極めて至難とされ、配兵の重点を石垣島に置き、周辺の離島は竹富島、小浜島、西表島、与那国島を除き無防備状態を余儀なくされている。その石垣島でも陸海軍３ヶ所の飛行場周辺と宮良湾一帯は陣地の密度が高いものの、島全体を５区域に分けて配備された５個の独立歩兵大隊は各々の区域内で中隊、小隊、分遣隊と分隊し、小規模な陣地を展開させている。つまり、絶対的に少ない兵力の中で何とか遣り繰りしている状況である。このことは後述する第４章の各戦争遺跡の中で陣地の配置状況、規模を見ても概観できる。

次に住民避難の面から見ると石垣島・西表島は山岳地帯を有しており、沖縄本島の北部と同様、戦時に

おける住民避難地に適すると軍部は見ていた。そこで八重山旅団は石垣島の各部落、周辺離島の住民の避難地先を極秘に計画した。しかし、旅団が計画した避難地先はマラリアの有病地帯であり、近世期からマラリアに苦しめられてきた歴史をもつ八重山諸島の住民にとって、旅団の指定した避難地に行くことは受け容れ難いことであった。また旅団も避難計画を作成する段階でマラリアについての調査、対策も講じていた。しかし、戦況が悪化するにつれて旅団は甲号戦備令を下命する前に避難計画通りに住民を強制的に避難させた。その結果、マラリアにより3,647人の死亡者を出すこととなった。マラリアによる危険性よりも軍事上の戦略が優先された結果がこのような惨事を生んだといえる。

最後に、軍事作戦、住民避難の二つの側面を述べた上で共通する要素の一つとして八重山諸島の「地理的環境」が挙げられる。八重山諸島の場合、軍事面では南西諸島全体での位置、諸島内の地形等を踏まえたうえで第32軍の軍事戦略、作戦等が決められ、また配備された八重山旅団指揮下の各部隊も山岳地形を利用した遊撃戦用の複廓陣地を多数構築したこと、住民避難では山岳地帯を有する石垣島・西表島が住民避難地として利用されたことは、その地域の「地理的環境」が大きな影響を及ぼしている。そして、その「地理的環境」の違いは八重山諸島だけではなく、沖縄県の各地域で展開された沖縄戦が地域によって多様な側面を持つ要因の一つとなっているといえる。

第３表　石垣島住民のマラリア死亡状況

町村名	部落名	罹患者数	死亡者数	死亡率(%)
石垣町	登野城	1,760	633	35.97
	大川	891	226	27.60
	石垣	1,017	149	13.47
	新川	1,390	373	41.86
	川平	72	7	9.72
	計	5,130	1,388	27.06
大浜村	平得	613	264	43.07
	真栄里	239	88	36.82
	大浜	1,805	479	26.54
	宮良	901	107	13.00
	白保	1,184	169	14.07
	開南	27	0	0
	川原	44	0	0
	川辺	45	1	2.22
	伊原間	57	0	0
	平久保	15	0	0
	計	4,930	1,108	22.59
合計		10,060	2,496	24.81

(注) 大田静男著『八重山の戦争』（1996年）から作成

第４表　竹富村外島住民のマラリア死亡状況

村名	島名	部落名	罹患者数	死亡者数	死亡率(%)
竹富村	竹富島	竹富	77	7	9.09
	小浜島	小浜	862	124	14.38
	黒島	黒島	128	19	14.84
	新城島	新城	144	24	16.67
	波照間島	波照間	1,587	477	30.05
	鳩間島	鳩間	526	59	11.21
	西表島	古見	23	5	21.74
		南風見	164	21	12.80
		西表	98	6	6.12
		白浜	25	25	100.00
		丸三	19	18	94.73
		小計	329	75	22.12
	計		3,653	785	21.43
与那国村	与那国島	祖納	1,757	203	11.55
		髙川	473	13	2.75
		久部良	941	150	18.81
	計		3,171	366	11.54

第４章　各市町村における戦争遺跡

第５表　八重山諸島地区の戦争遺跡表

石垣市

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
1	フルスト原の海軍壕群	石垣市	大浜	人工壕	弾薬庫
2	宮良の特攻艇秘匿壕群	石垣市	宮良	人工壕	秘匿壕
3	地域御嶽の壕	石垣市	平得	人工壕	陣地壕
4	シイ原の壕	石垣市	真栄里	人工壕	陣地壕
5	大浜の掩体壕	石垣市	大浜	構築物	掩体壕
6	平久保崎の海軍特設見張所跡	石垣市	平久保	構築物	監視哨
7	川平湾の特攻艇秘匿壕群	石垣市	川平	人工壕	秘匿壕
8	於茂登前山の高射砲砲座跡と弾薬庫壕	石垣市	開南	構築物	砲台・弾薬庫
9	伊野田半島の壕	石垣市	桃里	人工壕	陣地壕
10	白保与那原の壕	石垣市	白保	人工壕	陣地壕
11	名蔵の海軍トーチカ	石垣市	名蔵	構築物	トーチカ
12	石垣氏宅の避難壕	石垣市	宮良	人工壕	避難壕
13	仲間岡の壕	石垣市	川平	人工壕	陣地壕
14	平喜名飛行場跡の電波探知機壕	石垣市	真栄里	人工壕	電波探知機壕・発電機壕
15	宮良牧中の避難壕	石垣市	宮良牧中	自然壕	避難壕
16	伊原間のサビチ洞	石垣市	伊原間	自然壕	避難壕
17	白水の戦争遺跡群	石垣市	白水	人工壕・塹壕など	奉護壕・行政壕など
18	石垣島地方気象台の弾痕跡	石垣市	登野城	建造物	その他
19	於茂登岳の戦争遺跡群	石垣市	於茂登	人工壕・構築物	司令部跡・病院壕・銃眼など
20	登野城小学校の奉安殿	石垣市	登野城	建造物	記念碑
21	崎枝の電信屋	石垣市	崎枝	建造物	その他
22	前勢岳南麓の砲台跡	石垣市	新川	構築物	砲台
23	大浜ナーカーラの壕	石垣市	大浜	人工壕	陣地壕
24	バンナ岳の戦争遺跡群	石垣市	大川、石垣	人工壕・塹壕など	陣地壕
25	前勢岳の壕・塹壕	石垣市	新川	壕・塹壕	陣地壕
26	ヘーギナー壕・三連結壕	石垣市	大浜	人工壕	陣地壕
27	ブンニの壕	石垣市	大川	人工壕	避難壕
28	八重山旅団司令部壕	石垣市	大川	人工壕	陣地壕
29	フクブクイーザー	石垣市	登野城	自然壕	避難壕
30	サンニの慰安所	石垣市	登野城	構築物	その他
31	登野城パラピード入り口の壕	石垣市	登野城	人工壕	陣地壕

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
32	真栄里海岸の銃眼跡	石垣市	真栄里	人工壕	機関銃壕
33	大浜東海岸の銃眼跡	石垣市	大浜	人工壕	機関銃壕
34	御真影奉還所壕	石垣市	大浜	構築物	その他
35	宮良・高山原の垂直L字型壕	石垣市	宮良	人工壕	陣地壕
36	ナカノオンの壕	石垣市	宮良	自然壕	避難壕
37	宮良住民避難壕(ナーバカ)	石垣市	宮良	自然壕	避難壕
38	幕田隊銃眼跡	石垣市	宮良	人工壕	機関銃壕
39	宮良バタンジ洞窟	石垣市	宮良	自然壕	避難壕
40	宮良河口の震洋特別攻撃隊特攻艇桟橋跡	石垣市	宮良	構築物	桟橋
41	与那原の壕	石垣市	白保	自然壕	避難壕
42	観音埼灯台下の銃眼跡	石垣市	新川	人工壕	機関銃壕
43	於茂登前山かまど跡と井戸跡	石垣市	真栄里	構築物	その他
44	嵩田山麓の砲座跡(独立歩兵隊第299大隊稲垣隊)	石垣市	登野城	構築物	砲台
45	嵩田壕(八重山農林高校実習牧場入口の壕)	石垣市	登野城	－	－
46	バンナスカイライン東入口壕、塹壕、タコ壺	石垣市	登野城	人工壕・塹壕など	陣地壕
47	ペンサンガーラ上流のかまど跡(炊事用)	石垣市	名蔵	構築物	その他
48	カラ岳東の壕(重砲兵第8連隊小隊陣地跡)	石垣市	白保	人工壕	陣地壕
49	カラ岳西の壕(重砲兵第8連隊小隊陣地跡)	石垣市	白保	人工壕	陣地壕
50	白保飛行場の格納庫跡(周辺に数ヵ所)	石垣市	白保	自然壕	陣地壕
51	白保ウイズ遺跡東の壕	石垣市	白保	人工壕	－
52	三和の壕	石垣市	大浜	人工壕	陣地壕
53	マギーアボー	石垣市	宮良	自然壕	避難壕
54	屋良部岳の銃台座跡	石垣市	崎枝	構築物	銃座
55	山川御嶽近辺の壕	石垣市	川平	－	－
56	獅子岡の壕	石垣市	川平	人工壕	陣地壕
57	シーラ原山腹にあるカノン砲台座跡	石垣市	名蔵	構築物	砲台
58	桴海於茂登山頂の曾我部隊塹壕	石垣市	桴海	塹壕	陣地壕
59	八重山神社	石垣市	真栄里	構築物	神社
60	鳥鳴山のL字型壕	石垣市	桃里	人工壕	陣地壕
61	武那田原の山頂L字型壕	石垣市	桃里	人工壕	陣地壕
62	ヌーダアブ(1)	石垣市	伊原間	自然壕	避難壕

第６表　八重山諸島地区の戦争遺跡表

石垣市

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
63	ミッチャアブ	石垣市	伊原間	自然壕	避難壕
64	イガイズ	石垣市	伊原間	自然壕	避難壕
65	ヌーダアブ(2)	石垣市	伊原間	自然壕	避難壕

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
66	安良岳の海軍特設見張所跡(石垣特設見張所)	石垣市	平久保	構築物	監視哨
67	石垣村忠魂碑	石垣市	石垣	碑銘	記念碑
68	大浜村忠魂碑	石垣市	大浜	碑銘	記念碑
69	海軍弾薬庫壕	石垣市	大浜	人工壕	弾薬庫壕

竹富町

各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
1	竹富島南海岸の銃眼	竹富島	竹富	人工壕	機関銃壕
2	ヤンガー	竹富島	竹富	自然壕	自然壕
3	ティラクガマ	竹富島	竹富	自然壕	自然壕
4	トゥールングックの地下壕	竹富島	竹富	人工壕	陣地壕
5	竹富村忠魂碑	竹富島	竹富	碑銘	記念碑
6	国吉家の弾痕跡	竹富島	竹富	建造物	その他
7	河上家の弾痕跡	竹富島	竹富	建造物	その他
8	アールムティの特攻艇秘匿壕	小浜島	小浜	人工壕	秘匿壕
9	インメーアボー	小浜島	小浜	自然壕	避難壕
10	ニシヌハマの壕	小浜島	小浜	自然壕	避難壕
11	東筋の避難壕	黒島	黒島	自然壕	避難壕
12	仲本の避難壕	黒島	黒島	自然壕	避難壕
13	ニスヌガマ	新城島	新城	自然壕	避難壕
14	ゲーツヌアブ	新城島	新城	自然壕	避難壕
15	フツァーミアブ	新城島	新城	自然壕	避難壕
16	ウフフツアブ	新城島	新城	自然壕	避難壕
17	北集落の避難壕	波照間島	波照間	自然壕	避難壕

各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
18	キッパリヤマの壕	波照間島	波照間	自然壕	避難壕
19	アンヌカー	鳩間島	鳩間	自然壕	避難壕
20	パチンガカー	鳩間島	鳩間	自然壕	避難壕
21	大原のフサトゥルバー	西表島	大原	自然壕	避難壕
22	古見の避難壕	西表島	古見	自然壕	避難壕
23	船浦の避難壕・ヒナイ崎の壕	西表島	船浦	自然壕	避難壕
24	上原の避難壕	西表島	上原	自然壕	避難壕
25	干立集落入口の壕	西表島	干立	人工壕	避難壕
26	祖納の一班壕	西表島	祖納	自然壕	避難壕
27	金田家の壕	西表島	祖納	人工壕	避難壕
28	松山家の壕	西表島	祖納	人工壕	避難壕
29	白浜の避難壕	西表島	白浜	人工壕	避難壕
30	船浮の避難壕	西表島	船浮	人工壕	避難壕
31	船浮の戦争遺跡群	西表島	船浮	人工壕・構築物	秘匿壕・発電機壕・弾薬庫壕・水源ダム・桟橋
32	南風見田の忘勿石	西表島	南風見	碑銘	記念碑
33	パイミ崎の監視所跡	西表島	崎山	建造物	監視哨

船浮要塞

各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
①	内離島砲台跡	西表島	内離島	構築物	砲台
②	陸軍病院跡	西表島	内離島	構築物	病院
③	船浮要塞司令部跡	西表島	内離島	構築物	その他
④	成屋の慰安所跡	西表島	内離島	構築物	その他
⑤	祖納砲台跡(4基)	西表島	祖納	構築物	砲台
⑥	軍避難壕	西表島	外離島	自然壕	避難壕
⑦	外離島砲台跡	西表島	外離島	構築物	砲台
⑧	擬砲跡、塹壕、避難壕	西表島	外離島	人工壕・塹壕等	避難壕、その他

各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
⑨	兵舎跡	西表島	外離島	構築物	兵舎
⑩	兵舎跡	西表島	外離島	構築物	兵舎
⑪	小野隊兵舎跡	西表島	外離島	構築物	兵舎
⑫	防空壕	西表島	外離島	人工壕	避難壕
⑬	サバ崎の擬砲跡	西表島	サバ崎	構築物	その他
⑭	桟橋跡	西表島	サバ崎	構築物	桟橋
⑮	サバ崎の兵舎跡	西表島	サバ崎	構築物	兵舎

与那国町

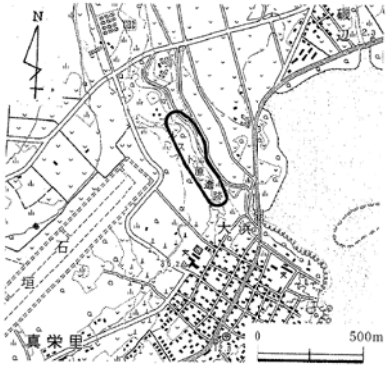
各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
1	田原川の壕	与那国町	祖納	自然壕	避難壕
2	カマヌタ	与那国町	祖納	自然壕	避難壕
3	プナビダヤ	与那国町	久部良	自然壕	避難壕
4	クブラバルダヤ	与那国町	久部良	自然壕	避難壕

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
5	桃原の避難壕	与那国町	久部良	自然壕	避難壕
6	比川の避難壕	与那国町	比川	自然壕	避難壕
7	潮原の陸軍兵舎跡	与那国町	祖納	構築物	兵舎
8	伊波南哲詩碑	与那国町	祖納	碑銘	記念碑

※トーンは本報告書掲載戦争遺跡

第１節　石垣市

１.フルスト原の海軍壕群



所在地：石垣市大浜
立地（標高）：平地（約10ｍ～25ｍ）
形態：人工壕
種別：弾薬庫壕
現状：残存状況は良好
保存状況：段丘内に放置
築造者：旧日本海軍
築造年月日：1944年（昭和19）頃
戦時中の使用状況：弾薬庫として利用
主な遺構：壕

概　要

フルスト原遺跡の東側には石灰岩の段丘が北西―南東方向に走り、その段丘下には海軍が弾薬庫として使用した壕が８ヶ所確認されている。

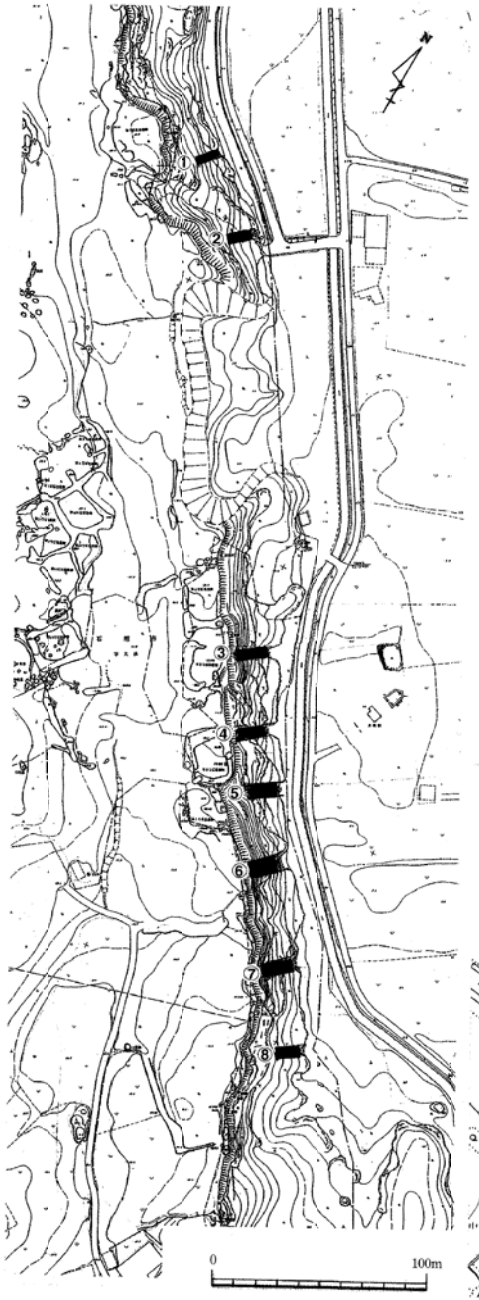
壕は採石場を挟み北西側に２ヶ所、南東側に６ヶ所それぞれ25ｍ～30ｍとほぼ等間隔に配置されている。北西側の２ヶ所はすぐ傍に農道が走り、フルスト原遺跡の石碑が建てられている(壕②入口前)が、南西側の６ヶ所は雑木に覆われた状態である。開口部は北東向きで、全て一直線状になっており、全長30ｍ～35ｍ、幅３ｍ、高さ1.8ｍ～２ｍでほぼ一定しており画一的な構造と言える。壕の内部は残存状況が概ね良好で、土留石積み(壕②)や、灯り取り(壕④、⑧)、床面に枕木痕(壕⑦)が見られる。現在、壕一帯はフルスト原遺跡の敷地内に含められている。

当該の壕群から北西に約800ｍに位置する石灰岩の段丘沿いにも、戦時中、海軍が弾薬庫として利用した壕も３ヶ所見られる。壕は開口部がいずれも東向きで、幅1.8ｍ～2.4ｍ、高さ1.7ｍ～２ｍ、奥行はいずれも約５ｍ程と小規模である。内部には床面に石敷きが見られる箇所も見られるが、いずれも粗く造られている。現在は、改場の敷地内にあたり、牧場を作る際の造成土が壕の開口部を一部、埋没させている。

先述した２箇所の壕群は、現在のフルスト原遺跡の南西に戦時中建設された海軍南飛行

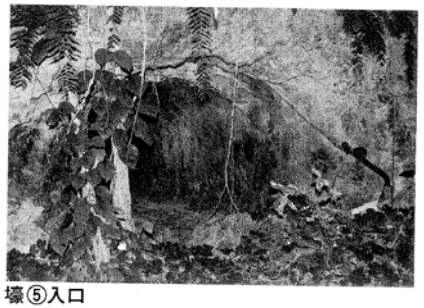
遠景（北東から）

壕②入口



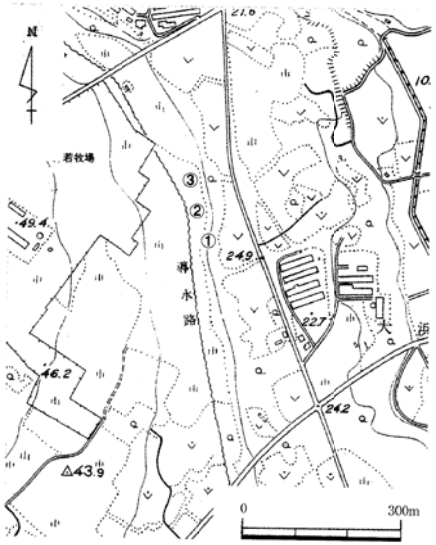
第４図　フルスト原の海軍壕群分布図

場（現・石垣空港）に伴う軍事施設だと考えられる。なお、壕の構築作業には朝鮮人が徴用されたとのことである。

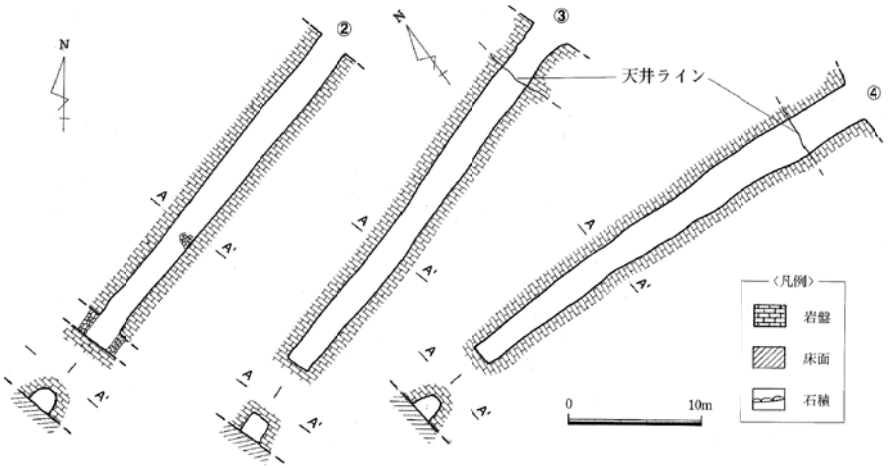


壕⑤入口

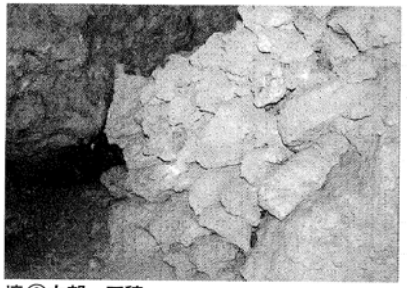
弾薬庫壕遠景（東から）



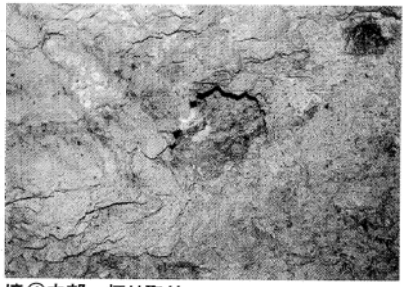
第５図　弾薬庫壕分布図



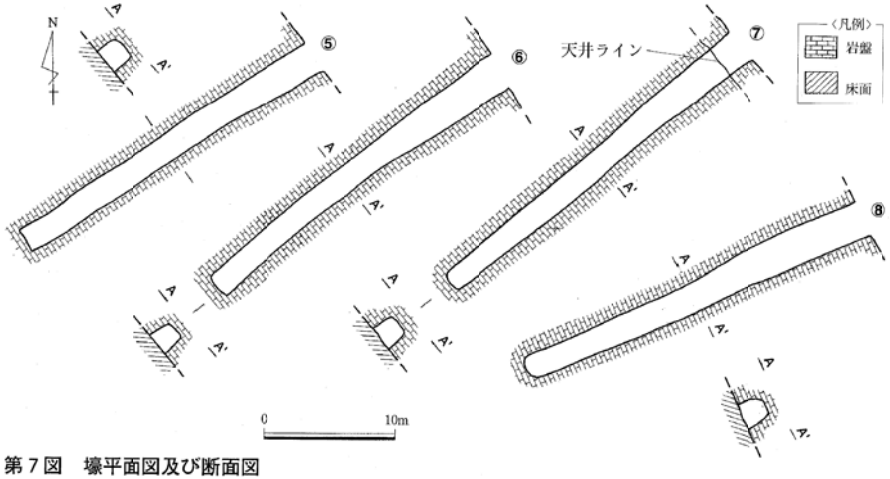
第６図　壕平面図及び断面図



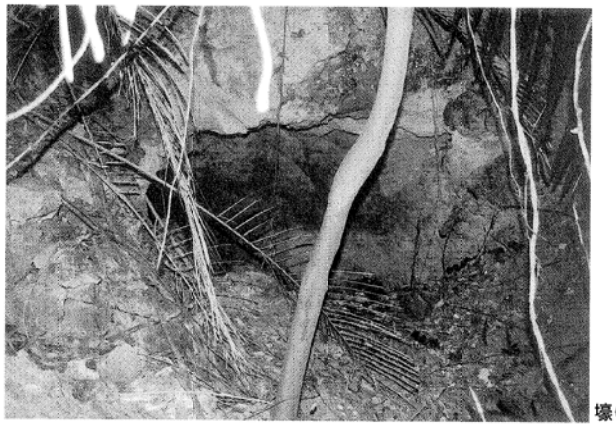
壕②内部　石積



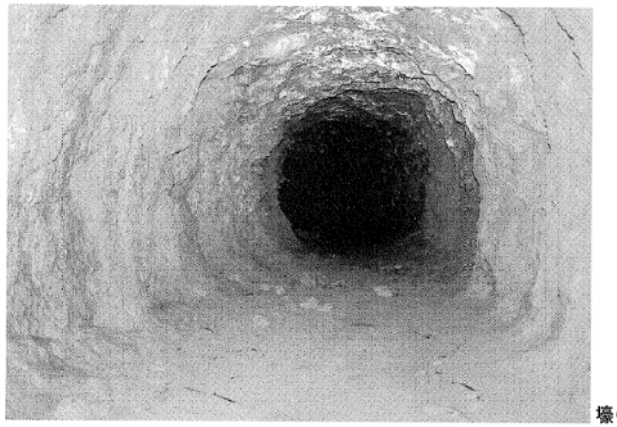
壕④内部　灯り取り



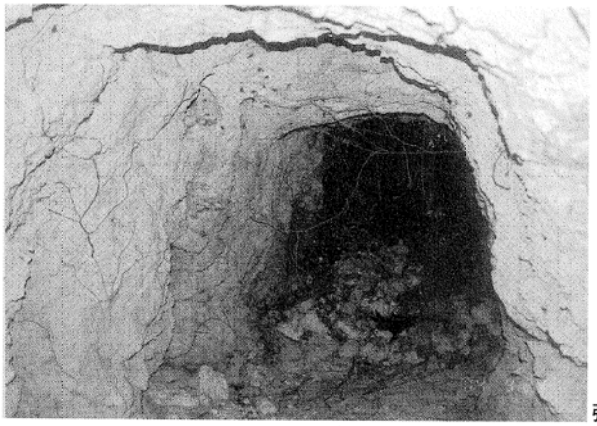
第７図　壕平面図及び断面図



壕⑥入口



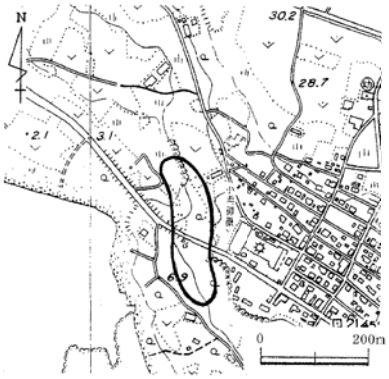
壕⑧内部



弾薬庫壕内部

2.宮良の特攻艇秘匿壕群

所在地：石垣市宮良
立地（標高）：平地（約5m～10m）
形態：人工壕
種別：秘匿壕
現状：一部、開口部が埋没
保存状況：宮良脇に放置
築造者：第23震洋隊
　　第38震洋隊
築造年月日：1945年（昭和20）頃
戦時中の使用状況：特攻艇の秘匿壕として
　　利用
主な遺構：壕



概　要

宮良集落の西側には、特攻艇の秘匿壕が現在も複数現存している。国道390号線を挟み、北側には第38震洋隊(以下、旅井部隊)が、南側には第23震洋隊(以下、幕田部隊)がそれぞれ構築した秘匿壕が残っている。

旅井部隊が構築した秘匿壕は４ヶ所確認できる。石灰岩を掘り込んだ壕と自然洞穴を利用した壕があり、約50m間隔で配置されている。一部、開口部の埋没や天井の崩落が見られるものの、残存状況は概ね良好である。入口はほぼ西向きで直線状に掘られ、内部は小部屋を有するもの(壕③、④)や、床面に枕木痕が１m間隔で12本残っている壕(壕④)も見られる。

旅井理喜男少尉率いる第38震洋隊は1945(昭和20)年１月に長崎県で編成され、当初は小浜島に駐屯していたが、基地の作戦配備上の問題で石垣島宮良に移動し、宮良では先に配備されていた幕田部隊から数百メートル離れたアラガーという場所に兵舎三棟、士官宿舎一棟を構えた。なお、秘匿壕周辺は軍関係者以外の立ち入りは制限されていた。

幕田部隊が構築した秘匿壕は、現在の「赤馬の碑」が建てられている直下に残っている。石灰岩を掘り込んだ２ヶ所の壕口からほぼ一直線状に進み奥で連結する「V」字状になっている。

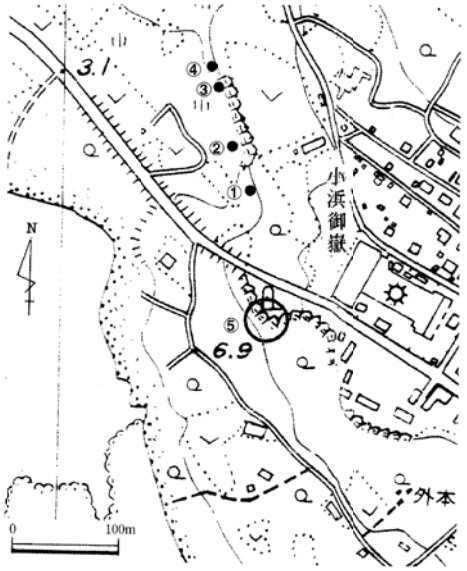
壕①～④遠景（南西から）

壕②入口

これら特攻艇の桟橋の基礎部分が宮良川河口に現在も残っている。集石が約15m幅で南側に突き出しており、干潮時にのみ海面から姿を出す。かなり波の浸食を受けているが桟橋のおおよその形態は窺うことができる。

聞き取りによると、かつて旅井・幕田両部隊の秘匿壕の地域一帯は、琉球石灰岩の段丘地形が断続していたが、国道の道路工事による掘削により、段丘が分断され、複数の秘匿壕が跡形もなく消滅し、さらに現在残っている旅井部隊の秘匿壕も入口は削られているとの事である。

秘匿壕周辺には、ムニンヤーと呼ばれる浜に銃眼や、干潮時に見られる特攻艇の桟橋跡、幕田部隊が兵舎を建てたと言われる外本御嶽周辺には、当時使用していた井戸、自然の避難壕の入口前に爆風除けとして構築された石積みが現存している。

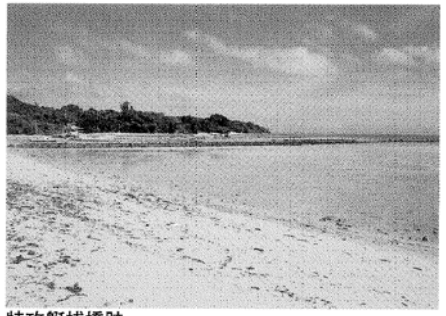


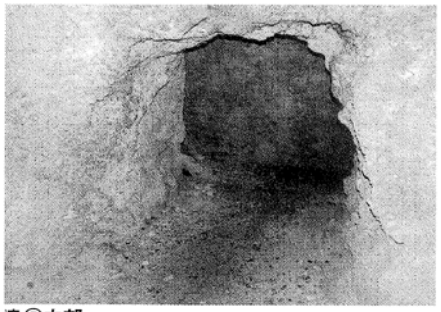
第８図　宮良の特攻艇秘匿壕群分布図

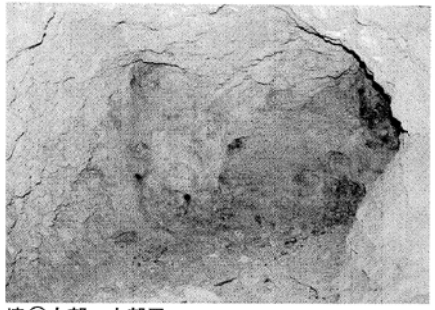
壕④入口

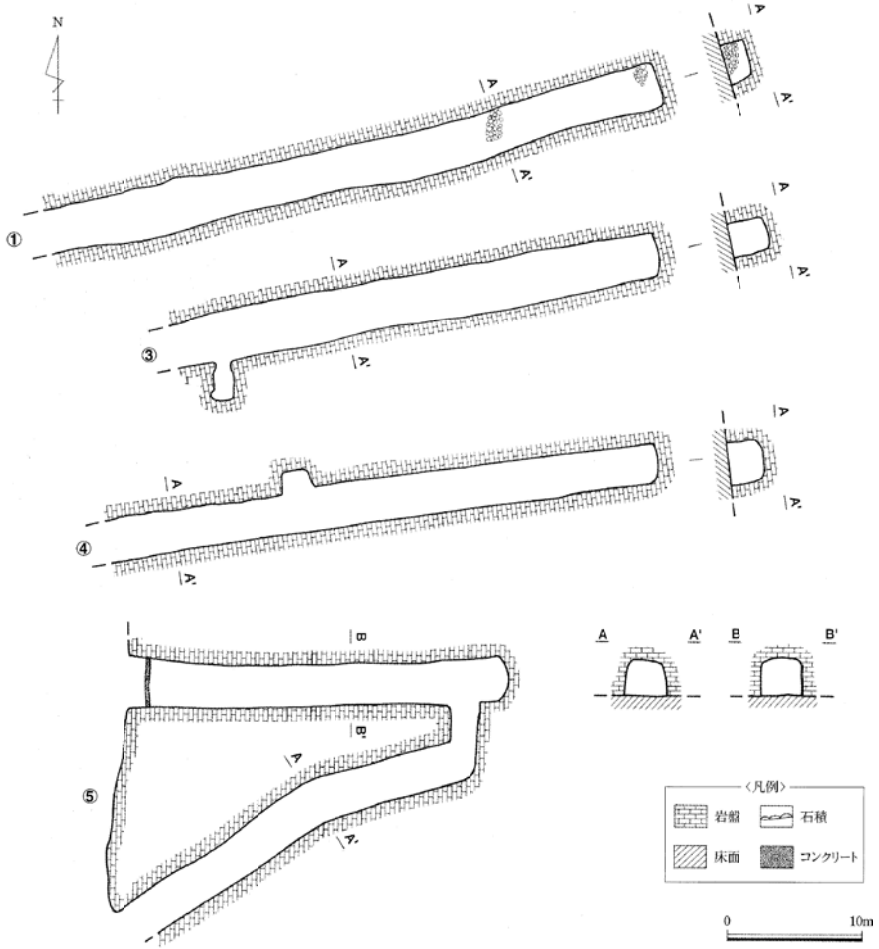
壕⑤入口

壕④内部


特攻艇桟橋跡


壕⑤内部

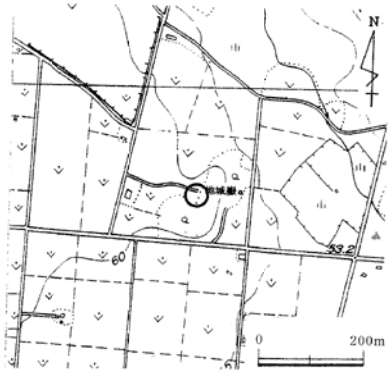

壕④内部　小部屋



第９図　壕平面図及び断面図

3.地城御嶽（ギシュク）の壕

所在地：石垣市平得
立地（標高）：平地（約60m）
形態：人工壕
種別：陣地壕か
現状：一部崩落が見られるが概ね残存状況は良好
保存状況：地城御嶽内に放置
築造者：旧日本軍
築造年月日：1944年（昭和19）以降
戦時中の使用状況：陣地として利用か
主な遺構：壕

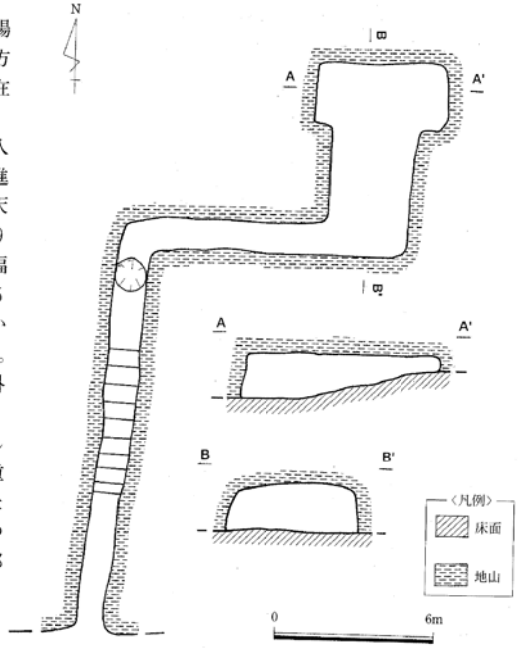


概　要

石垣浄水場から北東側に約600m離れた場所に地城御嶽（ギシュク）があり、御嶽の拝所から南西方向の低丘陵地下に旧日本軍が掘った壕が現在も残っている。

地山を掘り込んだ壕は、雑木に覆われた入口から途中直角に折れ曲がる通路を25m進むと、最奥部が部屋になっている。通路は天井がアーチを形成し、入口から5mの所で9段の階段をつくっている。階下に深さ0.5m、幅1.2mの陥没が見られる。最奥部の部屋は5m×2.5mの長方形で、高さ1.8m、天井がかまぼこ状になっており、丁寧に造られている。部屋の近辺に一部天井の崩落が見られる以外は、残存状況は良好といえる。

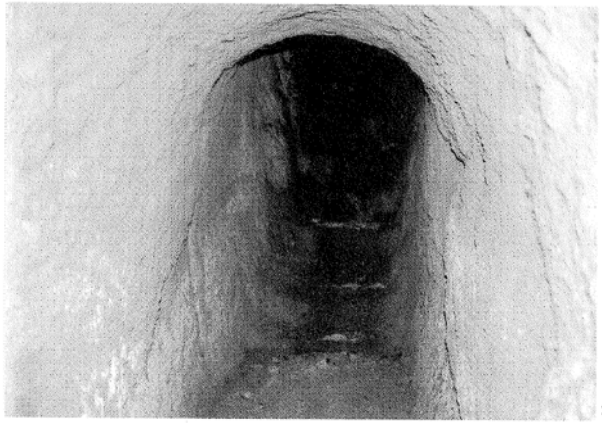
地城御嶽は平得地域でも由緒ある御嶽として知られ、王府時代には、沖縄本島から八重山へ赴任した役人は、必ず着任の参拝をしたと言われる。しかし、戦時中の使用状況については、軍が構築したという以外は不明な部分が多い。



第10図　地域御嶽の壕平面図・断面図

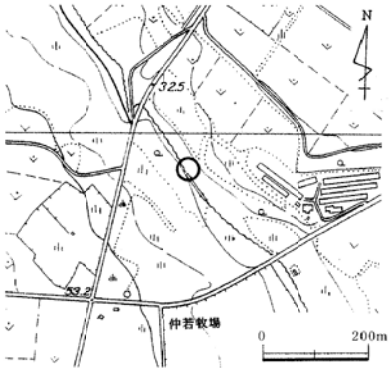
遠景（東から）

壕入口


壕内部

4.シイ原の壕

所在地：石垣市真栄里
立地（標高）：丘陵（約35m）
形態：人工壕
種別：陣地壕
現状：残存状況は良好
保存状況：林野内に放置
築造者：旧日本軍
築造年月日：不明
戦時中の使用状況：陣地として利用
主な遺構：壕、銃眼、通気孔



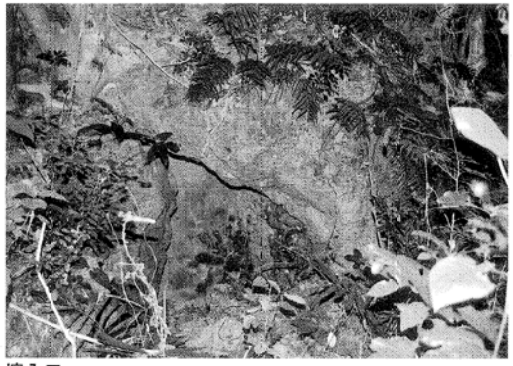
概　要

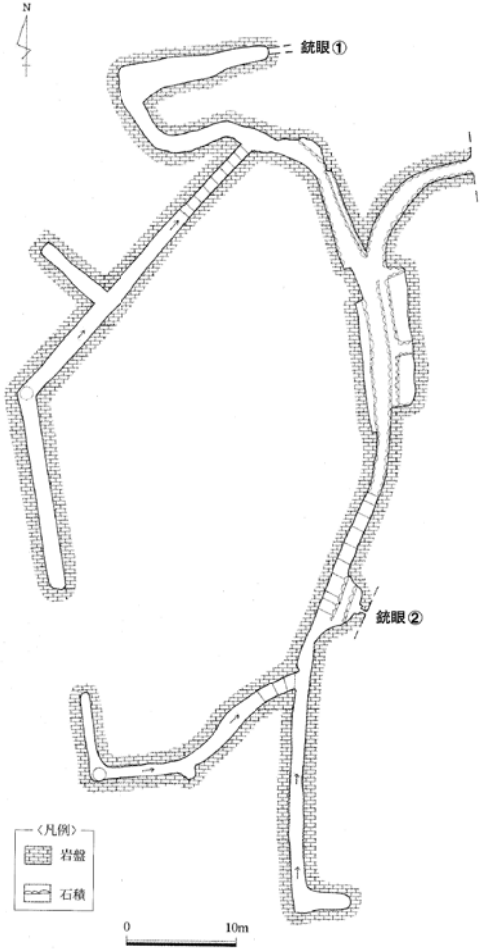
真栄里地域の通称パナダ森と呼ばれる低丘陵のふもと近くに所在する。旧日本軍が構築した壕だが、どの部隊が構築したかは不明である。

雑木に覆われた入口は小さく、外部からの確認は困難である。壕口は北東向きで石灰岩を掘り込んでいる。壕の内部は、南北に走る通路を中心に複数の支道を持つ複雑な構造となっている。通路は幅１ｍ～1.5ｍ、高さ1.2ｍ～２ｍで、天井はアーチ型で主に形成されている。壕の総延長は約180ｍを有し、八重山諸島の陣地壕では規模の大きい部類に入る。内部の遺構は銃眼が２ヶ所、直径１ｍ弱の空気孔が２ヶ所、階段が３ヶ所、奥行１ｍの小部屋や灯り取り、また途中で掘削を中断したと思われる箇所も見られる。なお、銃眼は銃を設置する固定溝が見られ、海軍北(平喜名)飛行場の方向に向けられている。

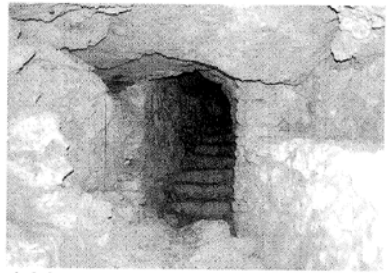
入口に近い通路の周辺は石積みが構築されているが、これは戦後に椎茸栽培をする為に造られた石積みである。遺構の現状としては、落盤もほとんど見られず、残存状況は極めて良好と言える。

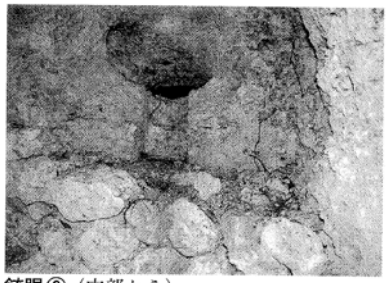
遠景（北から）

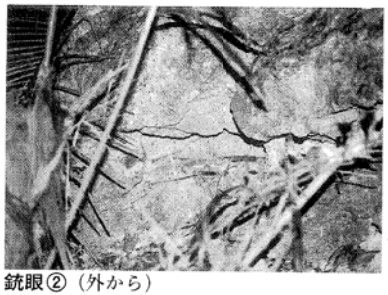

壕入口

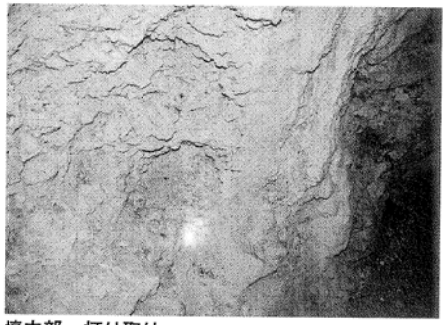


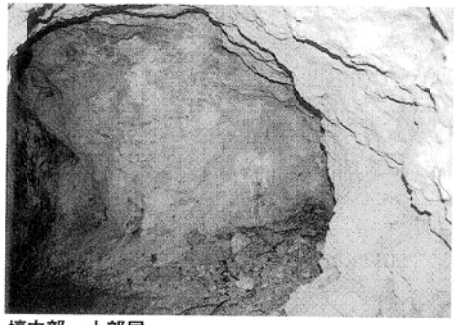
第11図　壕平面図


壕内部


銃眼②（内部から）

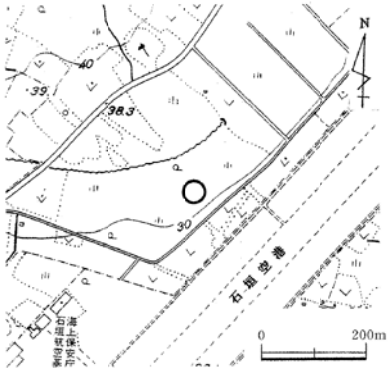

銃眼②（外から）


壕内部　灯り取り


壕内部　小部屋

5.大浜の掩体壕

所在地：石垣市大浜
立地（標高）：平地（約30m）
形態：構築物
種別：掩体壕
現状：鉄筋が露出し、老朽化が進む
保存状況：石垣空港脇に放置
築造者：旧日本海軍
築造年月日：1944年（昭和19）
戦時中の使用状況：海軍南(平得)飛行場の掩体壕として利用
主な遺構：掩体壕

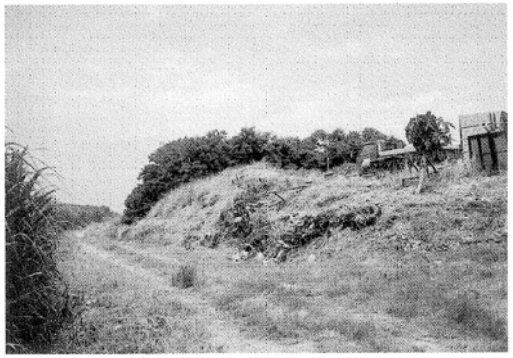


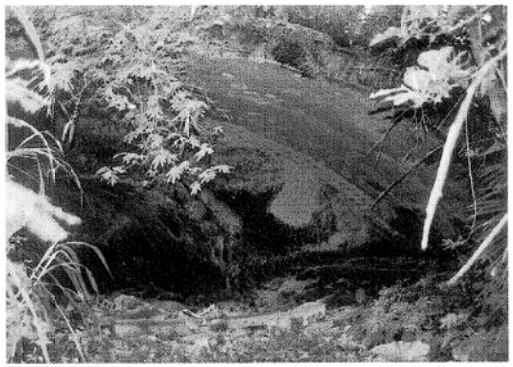
概　要

大浜の掩体壕は、石垣空港の滑走路北側にある農道から入った原野内に１基現存している。

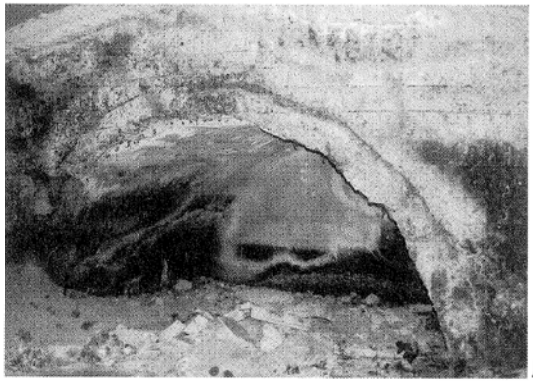
壕は開口部が滑走路側(南東)に向けられている。平面で見ると逆「凸」字状で、機体の主翼を格納する部屋と、奥に尾翼を含めた機尾部を格納する部屋を有し、天井を鉄筋コンクリートでアーチ状に覆う構造になっている。壕の計測値は、主翼部の部屋が幅15m、奥行5.7m、高さ3.9m、また機尾部の部屋は幅5.5m、奥行4.2m、高さ2.9mをそれぞれ測る。内部はコンクリートの散乱や、土砂の流入が見られるが、機体の胴体を収めるために、床面を掘り込んだ形跡が見られる。また、主翼格納部の奥壁や天井の一部は格子状の溝が確認できるが、これは戦後のスクラップ回収の際に、鉄筋を取り出すためにコンクリートを剥がし取った痕である。

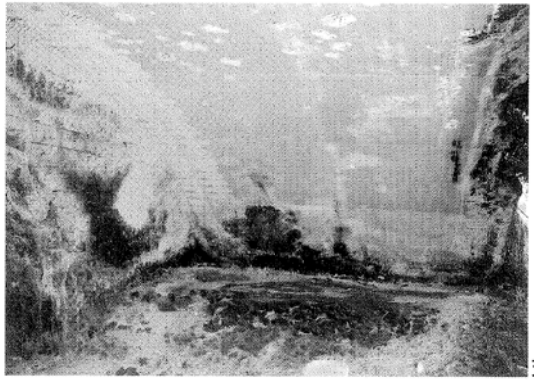
1944年（昭和19）に海軍南飛行場(現・石垣空港)として建設工事をする際に、掩体壕を含めた空港周辺の付属設備が整備されていくなか、同年６月15日に編成された海軍設営隊322部隊、通称･荻原部隊は８月上旬に沖縄本島から漁船や機帆船で石垣島に上陸し、海軍南飛行場の滑走路や防衛施設の設営にあたった。1945年（昭和20）１月中旬、緊急整備工事の指令が出され、２月末完成をめどに小型飛行機50機分の掩体壕建設が急ピッチで進められた。そのため飛行場周辺や北方のフルスト原、タナドウ原周辺の高台には、土を盛り上げた「コ」の字型の無蓋掩体壕やコンクリート製の有蓋掩体壕が構築された。そのなかで唯一現存している当壕は有蓋掩体壕に分類できる。


遠景（北東から）


掩体壕全景

現在、大浜の掩体壕は市民の文化財めぐりや戦跡学習に利用されている。

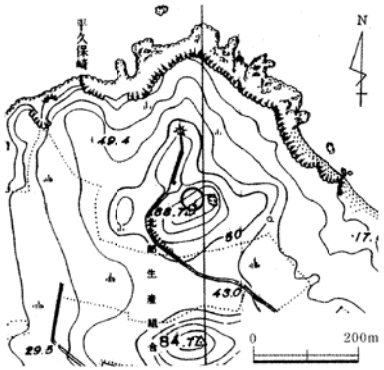

尾翼格納部


天井アーチ面

鉄筋露出状況

6.平久保崎の海軍特設見張所跡

所在地：石垣市平久保
立地（標高）：丘陵頂部（約88ｍ）
形態：構築物
種別：監視哨
現状：建物の基礎枠のみ残存
保存状況：平久保崎内に放置
築造者：大島防備隊古仁屋部隊(海軍)
築造年月日：1943年（昭和18）
戦時中の使用状況：監視哨として利用
主な遺構：建物の基礎枠とアンテナ塔跡

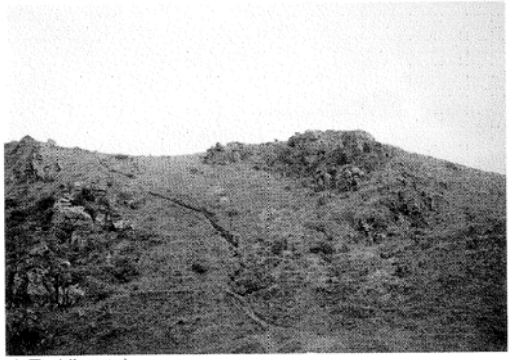


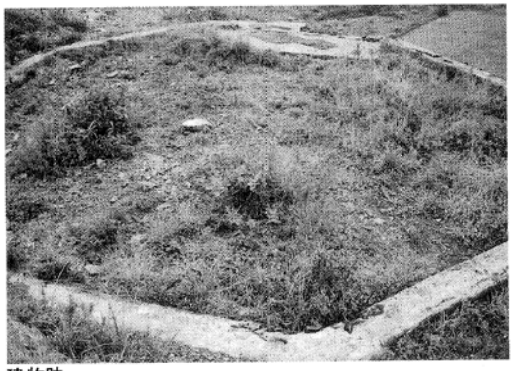
概　要

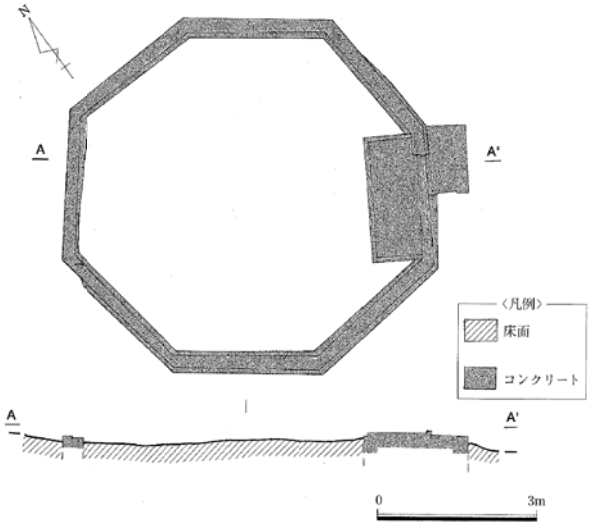
石垣島の最北端である平久保崎は、灯台や展望台、駐車場が整備され観光地として知られているが、駐車場の東にある丘陵の頂部には海軍が構築した見張所跡が現存している。

見張所跡の現状は建物の基礎枠が露頭している。基礎枠は一辺2.6ｍの正八角形をなし、花崗岩を平坦に造成しコンクリートを基礎にしている。コンクリート基礎には数ヶ所、打ち込まれた金具が露頭している。基礎枠の内部は花崗岩をバラス状にして、平場造成されており、また出入口と思われるコンクリート貼りの床面が基礎枠を挟んで内側と外側に残る。見張所跡からほぼ西に５ｍの場所には電信用のアンテナ塔跡が残る。コンクリート製で上面では直径1.7ｍの円形をなし、中央に孔（直径20cm）が２ヶ所見られる。また建物の周囲には金具が露頭したコンクリートのアンカー跡が３ヶ所確認できた。

海軍特設見張所は1943年（昭和18）に大島防備隊古仁屋部隊(小坪大尉)によって設置された。見張所設営の建築資材や器材は、伊原間、平久保の住民を動員して平久保崎灯台西の浜から陸揚げされた。現在の平久保崎灯台駐車場には兵舎が建てられ、10人程の兵隊がいたと言う。後に部隊は安良岳に移動。平久保、伊原間、平得の住民を徴用して安良岳山頂に陣地を構築した。


遠景（北から）


建物跡

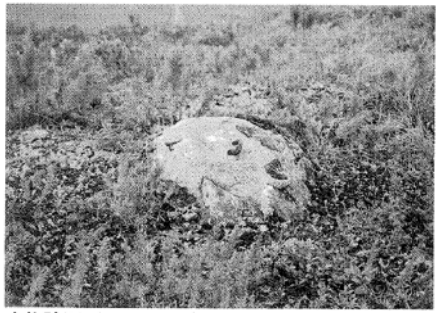


第 12 図　監視哨跡平面図及び断面図

建物跡入口部分

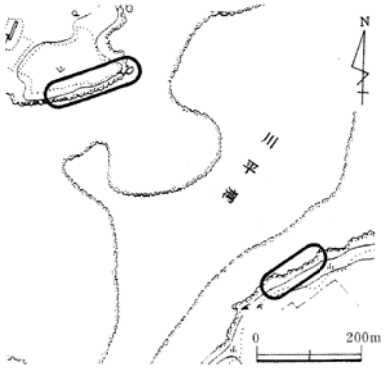
鉄筋露出状況

建物跡周辺アンテナ跡


建物跡周辺アンカー跡

7.川平湾の特攻艇秘匿壕群

所在地：石垣市川平
立地（標高）：海岸（約０ｍ～５ｍ）
形態：人工壕
種別：秘匿壕
現状：一部、落盤が著しい箇所有り
保存状況：海岸に放置
築造者：海軍第19震洋隊
築造年月日：1944年（昭和19）
戦時中の使用状況：特攻艇の秘匿壕として利用
主な遺構：壕

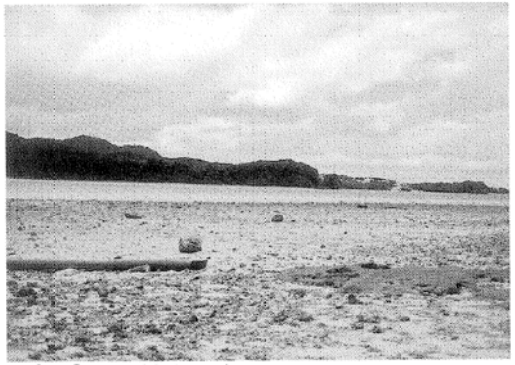


概　要

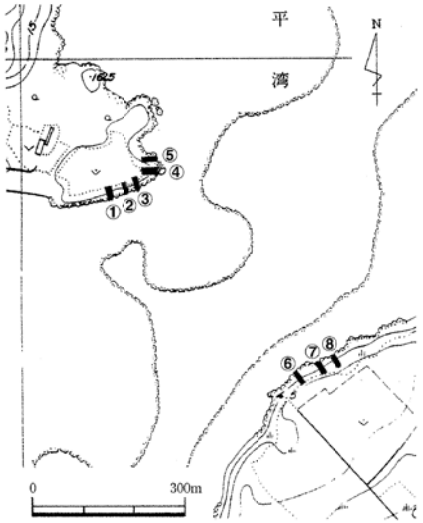
川平湾内の海岸には、海軍第19震洋隊(以下・大河原部隊)が構築した特攻艇の秘匿壕が川平集落に近い高屋側に５ヶ所、湾を挟んで対岸の仲筋側に３ヶ所の計８ヶ所確認できる。壕は全て、海辺まで石灰岩が露頭している部分にのみ掘り込まれており、自然壕を利用しているものや、人工的に掘り込まれたものもある。現在は海からの漂着物や土砂の流入等で入口を覆い、開口部がほとんど埋没しているものも見られる。また仲筋側の壕は落盤が著しい箇所が多い。

壕は開口部が高屋側が南東または東向き、仲筋側が北西に向けられており、内部は平面形が一直線状のものや途中で折れ曲がっているものも見られる。内部の加工は粗く、奥行は残存状況が良好なもので25ｍを測る。ほとんどの壕が床面から砂浜にかけてほぼフラットな状態だが、壕⑤のみ入口前に１ｍの段差をつけている。

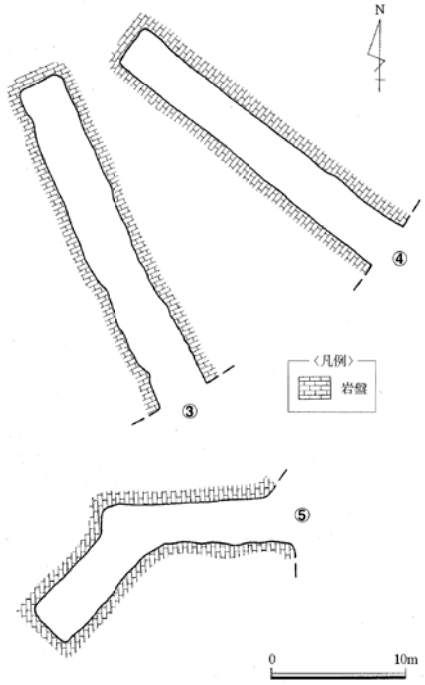
大河原部隊は1944年10月に長崎県川棚臨時魚雷艇訓練所において186人で編成され、震洋艇50隻を所有していた。同年11月、石垣島に到着し川平湾に震洋艇の格納壕や陣地を構築。構築作業には朝鮮人が爆破や岩盤を掘り、徴用された川平住民や与那国島の人々が土や石を運び出した。戦争中は米英軍の攻撃の目を避けながら震洋艇の突入訓練も行われていたというが、震洋艇の出撃はなかった。


壕①～⑤遠景（南東から）

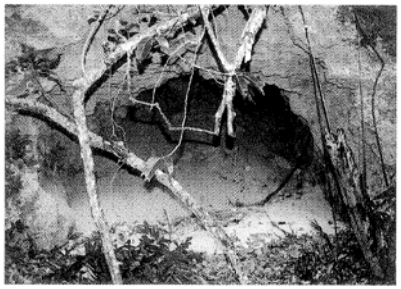
壕⑥～⑧遠景（北西から）

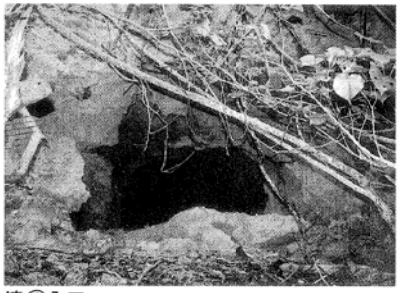


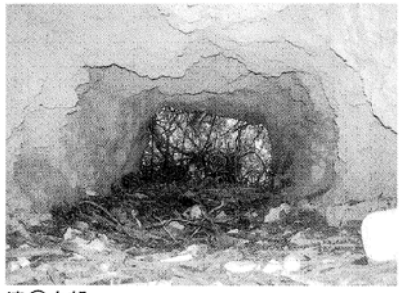
第 13 図　川平湾の特攻艇秘匿壕群分布図



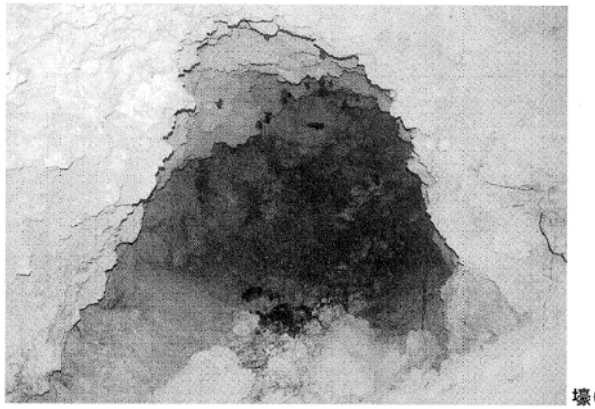
第 14 図　壕平面図


壕①入口


壕②入口

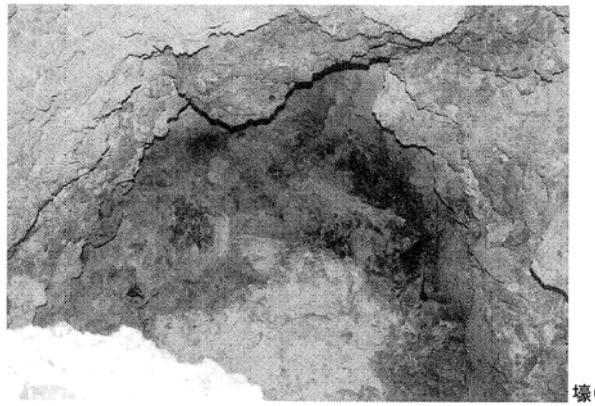

壕③内部

壕④入口



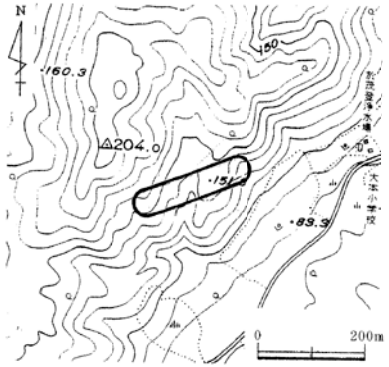
壕⑤内部

壕⑦入口



壕⑧内部

8.於茂登前山の高射砲砲座跡と弾薬庫壕



所在地：石垣市開南
立地（標高）：山腹（約150m～160m）
形態：構築物
種別：砲台、弾薬庫
現状：壕の残存状況は概ね良好、砲座跡は基礎まで破壊されている。
保存状況：山林内に放置
築造者：重砲兵第８連隊
築造年月日：1944年（昭和19）９月
戦時中の使用状況：12cmカノン砲を設置
主な遺構：砲座跡、弾薬庫壕

概　要

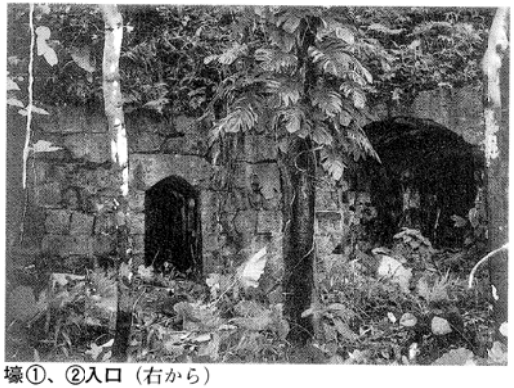
於茂登前山は石垣島の中央に位置するが、その南麓にある山林には、1944年重砲兵第８連隊が陣地として構築した高射砲の砲座跡とそれに伴う壕等の施設が現存する。砲座跡は２ヶ所有り距離にして約50m離れた場所に配置され、ほぼ同一の構造をしている。

南向きに造られた砲座跡は雑木や土砂の堆積で原型を窺い知る事はできない。周囲は花崗岩を加工した石積みを形成し、平面形で見ると「ハ」の字を上下対称に組み合わせた形状になっている。砲座の奥壁には壕の開口部が２ヵ所見られる。壕は側壁は花崗岩の切石にコンクリートを繋ぎ、アーチ状の天井はコンクリートで構築され一直線状になっている。

２つの壕に違いが見られるのは開口部で、壕①が開口部から幅1.8m、高さ２mで内部まで同規格なのに対し、壕②は内部の数値は壕①と同様ながら、開口部のみ幅0.75m、高さ1.7mと狭く造られている。壕①が側壁が一部破壊され土砂が流れ込んでいるのに対し、壕②は開口部が狭いため、土砂の流入は少なく側壁、天井ともほぼ原型を留めている。壕①、壕②と異なる残存状況に関しては、２ヶ所ともに共通した特徴である。

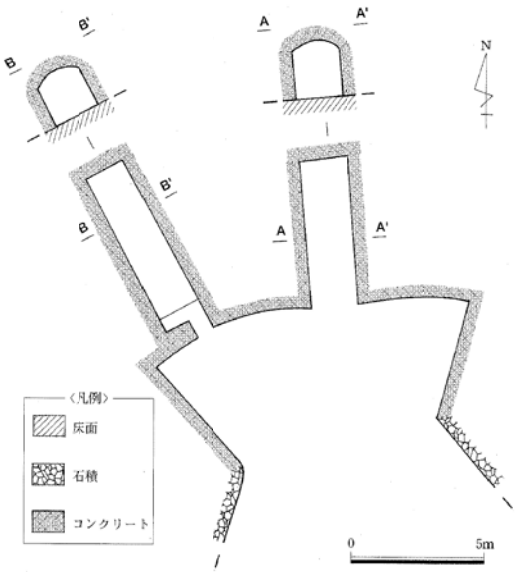
砲座跡の周辺の斜面には素掘りの壕が４ヶ所見られる。入口はほとんど埋没しているが、３ヶ所は並んで構築され壕間を行き来できるように入口前を平場造成している。

遠景（東から）



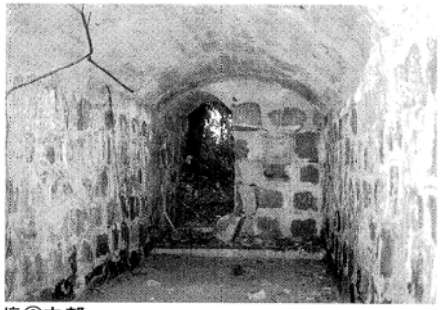
壕①、②入口（右から）

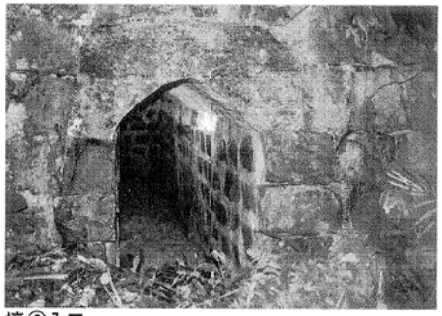
重砲兵第８連隊は元々、船浮要塞重砲兵連隊として1941年から西表島の船浮湾に建設された船浮要塞で陣地構築を主に行っていたが、1944年５月15日に重砲兵第８連隊と改称された。同年９月15日、重砲兵第８連隊は一部の部隊を西表島に残し主力は石垣島に移動、於茂登前山に陣地を構築した。当砲座には12㎝カノン砲が設置されていたという。



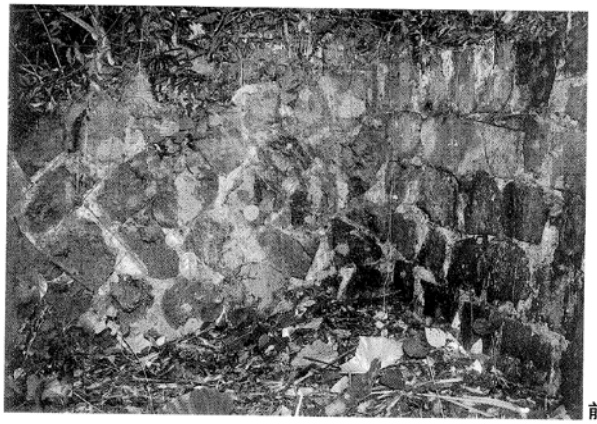
第15図　砲台跡と弾薬庫壕平面図及び断面図

壕①入口


壕②内部


壕②入口

壕①内部

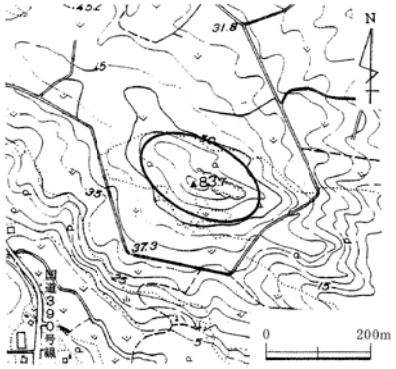

前庭部　石積

砲座跡周辺の壕①

砲座跡周辺の壕②

9.伊野田半島の壕

所在地：石垣市桃里
立地（標高）：丘陵（約80m）
形態：人工壕
種別：陣地壕
現状：一部、落盤が著しい箇所有り
保存状況：丘陵内に放置
築造者：独立歩兵第300大隊
築造年月日：1944年（昭和19）
戦時中の使用状況：陣地として利用
主な遺構：壕



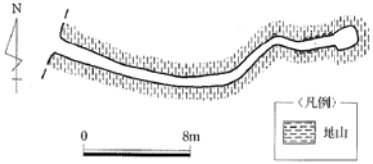
概　要

星野集落の北東部には伊野田半島がある。その中央部には松林に覆われた丘陵があり、その中腹に壕が掘られている。

地山を掘り込んだ壕で、西向きの開口部は落盤や土砂の堆積でかなり埋没している。開口部に比べ内部の残存状況は比較的良好といえる。通路の幅は0.6m～0.8m、高さ1.2m～1.6mを測り、天井はアーチ状となる。緩やかに蛇行しながら23m程進むと小部屋状になり幅1.7mと広くなる。小部屋は一部天井が崩落し、土砂の堆積で行き止まりになっている。小部屋に入る直前の通路には、両側壁に9ヶ所の部材痕と8ヶ所の灯り取りが確認され、煤も壁面に付着しているのが見られた。

遠景（南西から）

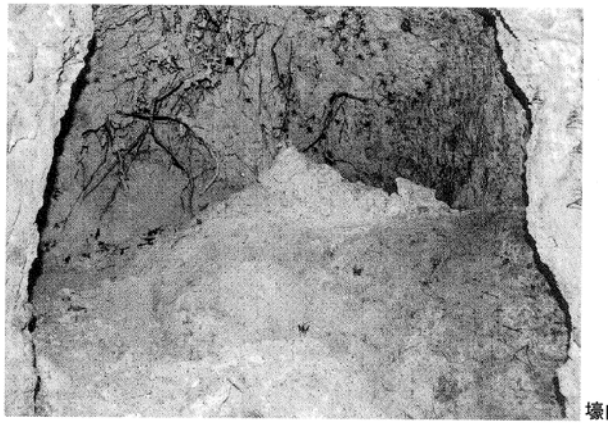
丘陵の一帯を踏査したところ、壕の近くに通気孔と思われる竪穴や塹壕らしき溝も確認できた。



第16図　壕平面図

滝口武臣大隊長率いる独立歩兵第300大隊（以下・滝口大隊）は、1944年8月23日に独立混成第45旅団（旅団長・宮崎武之少将）が八重山農学校（現・八重山農林高校）に旅団指令部を設置して以降、防備体制を固めるため同旅団の傘下部隊として石垣島に来駐。滝口大隊は於茂登岳を中心に島の東北部を担当した。当該の壕がある星野・桃里地域は滝口大隊第1中隊の小隊（隊長・乃一仁中尉）が配置された。最初は伊野田半島にいたが後に半島の南部を流れるフファナン川周辺に三角兵舎を設置し、星野集落の西に位置する鳥鳴き山に陣地を構築した。鳥鳴き山の頂上付近には垂直L字型の弾薬庫壕が現存する。

壕入口


壕内部

壕周辺　通気孔

10.白保与那原の壕

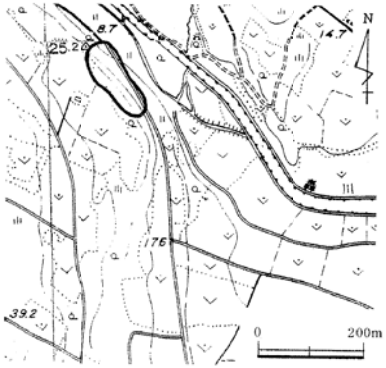
所在地：石垣市白保
立地（標高）：平地（約10ｍ）
形態：人工壕＋自然壕
種別：陣地壕
現状：残存状況は概ね良好
保存状況：農道脇に放置
築造者：旧日本軍
築造年月日：1944年（昭和19）
戦時中の使用状況：陣地として利用か
主な遺構：壕

概　要

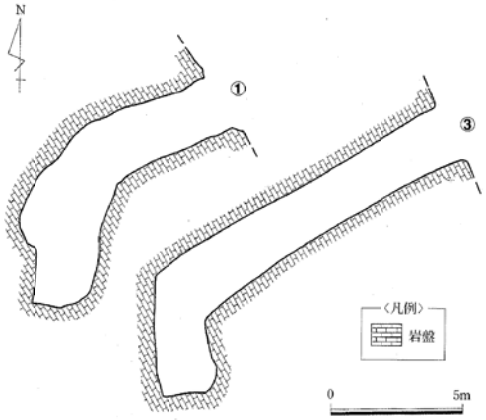
白保集落の北方、轟川沿いを走る農道脇の琉球石灰岩の段丘には、壕が３ヶ所現存している。

雑木に覆われた壕の開口部はいずれも北東に向けられ、壕①から壕②まで20ｍ、壕②から壕③までは27ｍの間隔をもつ。壕①は自然壕を利用したもので開口部、内部は不定形であるが、奥の方は一部加工痕が確認できる。壕②、壕③は人工壕で天井、床、壁は丁寧に掘削され、幅２ｍ～2.5ｍ、高さ1.5ｍ～1.8ｍとほぼ同規模である。壕②は北東―南西方向に一直線に掘られているが、現状は地下水が壕内部深くまで溜まり進入できない。奥行は目測ではあるが約20ｍ程である。壕③は北東―南西方向に12ｍ進むと、南に３ｍ屈曲する。奥壁には加工痕も見られる。壕②、壕③ともに残存状況は良好といえる。壕のある地域から北西側に段丘が続くため踏査を行ったが、壕は確認できなかった。

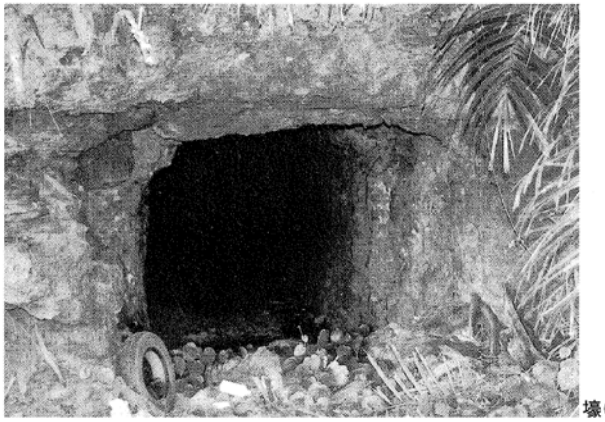
白保与那原の壕をどの部隊が構築したかは不明であるが、壕の南方には1944年６月から白保陸軍飛行場の建設が始まり、幅50ｍ、長さ２kmの滑走路を８月までに完成させた。壕から北西に約500ｍ離れた琉球石灰岩の段丘下には、白保飛行場の格納庫跡も存在することから、白保飛行場に関する陣地壕と考えられる。陸軍飛行場の完成後、飛行場あるいは飛行場周辺の防備を担当したのは、独立歩兵第298大隊（球6461部隊）と独立歩兵第301大隊（球6464部隊）である。



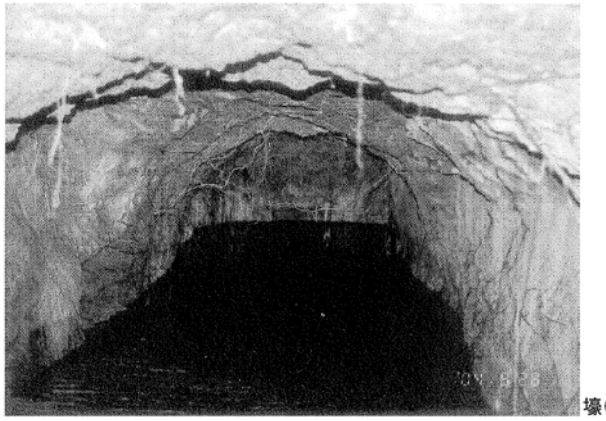
遠景（北東から）



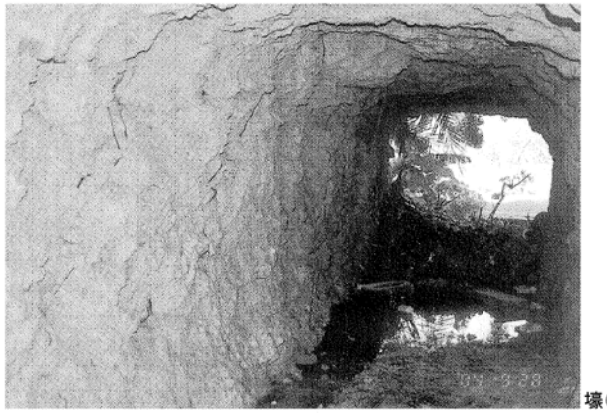
第17図　白保与那原壕の平面図



壕③入口



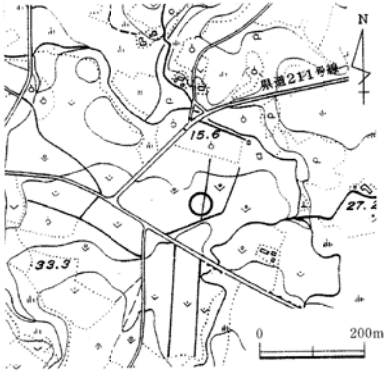
壕②内部　地下水浸透状況



壕③内部

11.名蔵の海軍トーチカ

所在地：石垣市名蔵
立地（標高）：平地（約30ｍ）
形態：構築物
種別：トーチカ
現状：樹庭夢農園の建物内に残る
保存状況：建物は倉庫として利用され、
　　ほぼ完全な形で残る
築造者：旧日本海軍
築造年月日：不明
戦時中の使用状況：不明
主な遺構：トーチカ

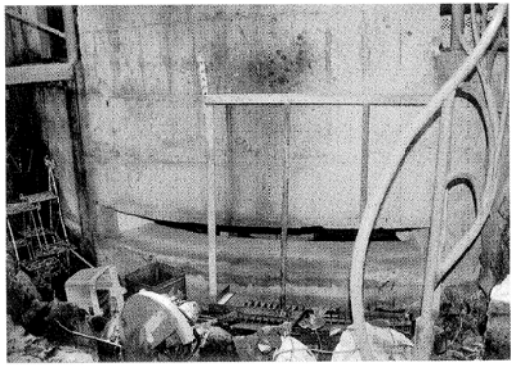


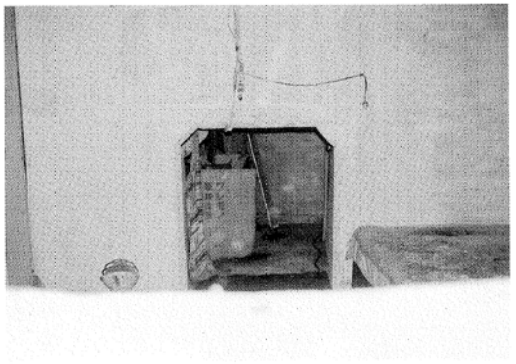
概　要

県道211号線を名蔵から開南方面へ進むと左手に樹庭夢農園があり、農園の敷地内の建物内部に海軍が構築したトーチカが現在も残されている。周辺地形はかなり改変され旧地形はほとんど留めていない。

現在は倉庫として利用されている建物に収まるように残されたトーチカはコンクリートブロックを積み上げて構築されている。戦後、鉄製の手すりや階段が付されているものの、ほぼ原形を留めている。緩やかに湾曲した外部に縦25㎝、横２ｍ、奥行50㎝の銃眼がほぼ西向きに開けられている。トーチカの内部は現在、進入することはできないがが、銃眼から中を覗くと方形の部屋と、その奥に通路を有しているのが見られる。

トーチカを海軍のどの部隊が構築したかは不明であるが、八重山諸島の中では、ほぼ完形の状態で保存されているのは当該トーチカのみで、貴重な戦争遺跡であるといえる。


トーチカ正面


トーチカ内部

12.石垣氏宅の避難壕

所在地：石垣市宮良
立地（標高）：平地（約15ｍ）
形態：人工壕
種別：避難壕
現状：戦後、開口部を塞いだ箇所有り
保存状況：石垣氏宅内に放置
築造者：宮良集落住民、第23震洋隊
築造年月日：1944年（昭和19）頃
戦時中の使用状況：宮良住民の避難壕と
　　して利用
主な遺構：壕

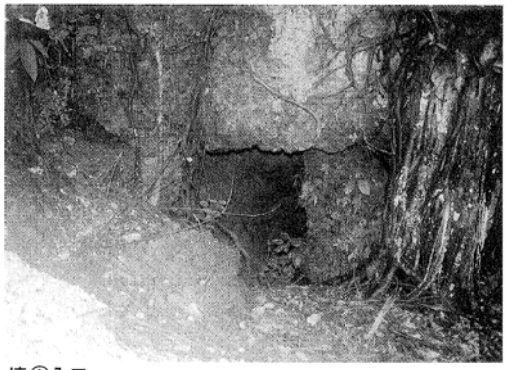
概　要

宮良在住の石垣實佳氏の自宅裏にある崖下には、戦時中宮良住民が掘り込んだ避難壕が現存している。

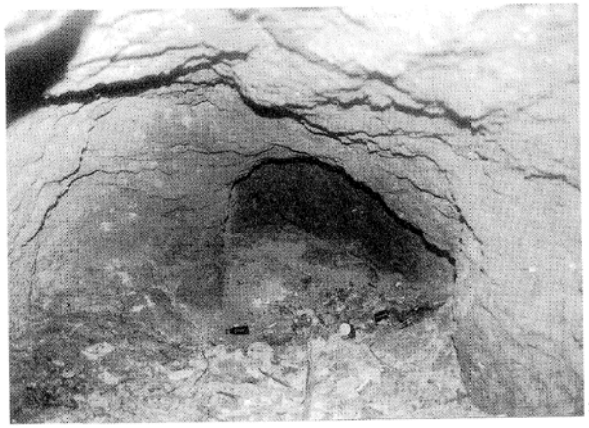
壕は全部で５ヶ所確認でき、石灰岩の自然壕をさらに掘り込んだものとなっている。開口部は南向きで内部に入ることが出来る壕は、壕①～壕③までである。内部は平面形が「Ｙ」状（壕①）、「く」状（壕②）、奥行が１ｍ程の小規模なもの（壕③）に分かれる。内部は土砂の流入が見られるものの、落盤は特になく残存状況は良好といえる。なお、壕④と壕⑤は戦後、宅地開発により開口部をコンクリートを繋いだ石組みで封鎖されている。

当該壕を構築したのは、宮良在住の小濱勝義氏をはじめとする数名で、小濱氏との聞き取りによると1944年（昭和19）頃から壕の掘削作業を開始し、壕①は宮良に駐屯していた第23震洋隊（幕田隊）が、崖上から内部に通じる縦穴を掘るよう下士官に指示し、縦穴は縄梯子で往来していたという。縦穴は現在の石垣氏宅の庭部分に通じていたが、現在は埋められている。戦時中は壕前にある畑に機銃が設置され、壕からは海軍南（平得）飛行場への艦砲射撃の様子が窺えたとのことである。また、宮良地域も空襲を受けたが、壕の位置が敵機の死角になっていたため直接壕内に被害を受けたことはなかったという。

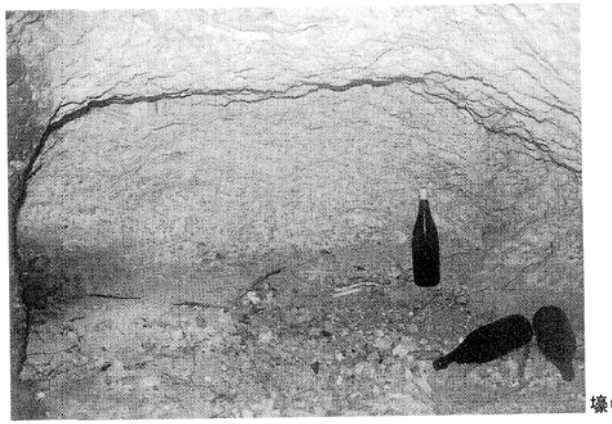
壕近景（西から）


壕①入口

壕④入口　封鎖状況



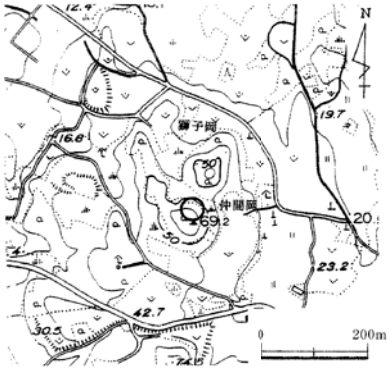
壕①内部



壕②内部

13.仲間岡の壕

所在地：石垣市川平
立地（標高）：丘陵（約60ｍ）
形態：人工壕
種別：陣地壕
現状：一部、落盤が著しい箇所有り
保存状況：仲間岡内に放置
築造者：独立歩兵第299大隊
築造年月日：1944年（昭和19）
戦時中の使用状況：陣地として利用
主な遺構：壕



概　要

川平集落の三大行事の一つ「結願祭」が行われる群星御嶽の東には、仲間岡、獅子岡と二つの小高い独立丘があり、そのうち仲間岡の登山道周辺に壕が２ヶ所現存している。

地山を掘り込んだ壕は山の麓と中腹に位置し、山頂まで続く登山道から近い場所にあるが、雑木に覆われており傍目には分かりにくい。麓にある壕は土砂で開口部が埋没しかかっている状況である。中腹にある壕は南側と北側に壕口があり、貫通している。登山道に近い壕口は南側にあたる。内部は樹根が張り出して通れない場所もあるが、目測で長さ約15ｍ程である。内部の幅は0.6ｍ～0.8ｍ、高さ1.0ｍ～1.2ｍを測り、天井はアーチ状につくられている。また、南側壕口から中に５ｍ程進むと、西側に分岐する通路も見られる。

仲間岡に壕を構築したのは、独立歩兵第299大隊（通称・高木部隊）の川平分遣隊（以下・渡辺部隊）である。1944年９月、川平国民学校（現・川平農村センター）に駐屯した。渡辺部隊は後に兵舎を集落の西側に位置する山川御嶽周辺に設置し、壕は仲間岡、獅子岡、山川御嶽周辺の山中に掘られた。壕は弾薬壕、糧秣壕として利用されたという。

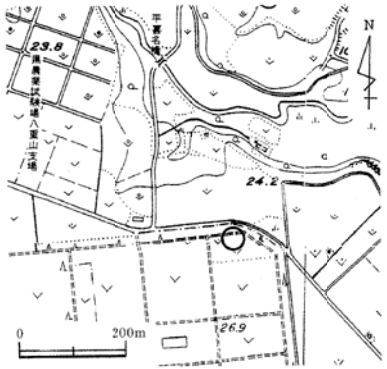
獅子岡、山川御嶽周辺の山中一帯も踏査を行ったが、通気孔のような竪穴は見られたものの、壕は確認することは出来なかった。

遠景（南西から）

北側壕口

14.平喜名（ヘーギナー）飛行場跡の電波探知機壕

所在地：石垣市真栄里
立地（標高）：平地（約25ｍ）
形態：人工壕
種別：電波探知機壕、発電機壕
現状：出入口が崩落。内部も一部埋没
保存状況：研究センター内に放置。
築造者：佐世保航空隊石垣島派遣隊
築造年月日：1944年（昭和19）頃
戦時中の使用状況：電波探知機、発電機を設置
主な遺構：レンガとコンクリートで構築した壕、発電機の設置台



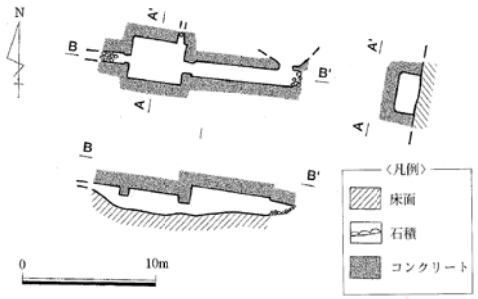
平喜名飛行場跡遠景（南東から）

概　要

現在、独立行政法人国際農林水産業研究センター（以下、研究センター）として使用されている敷地はかつて海軍北（平喜名（ヘーギナー））飛行場として軍事利用されていた。

平喜名飛行場は1933年から海軍飛行場として幅500ｍ、長さ550ｍの小型機用の簡易飛行場が建設された。1943年12月には佐世保海軍航空隊の石垣島派遣部隊（以下・観音寺部隊）が平喜名飛行場に駐屯。観音寺部隊は飛行場の拡張工事とともに、飛行場の北東に位置する宮良川上流地域に沿って弾薬や燃料倉庫、発電室などにあたる壕を多数構築した。戦後、これらの壕は道路舗装用の粟石採掘のためほとんど爆破されたとのことであるが、現在でも三本の壕が連結した壕（以下、三連結壕）や石垣島で最大といわれる壕、また研究センター敷地内にも電波探知機壕が残っている。

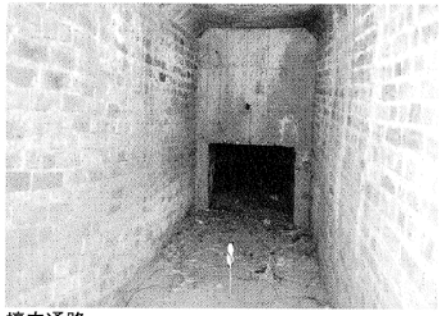
電波探知機壕は研究センター敷地内の北東縁辺部に位置する。元の出入口は埋没が著しく確認できず、天井が落盤し周辺が陥没している場所からしか現在は進入することはできない。壕の内部は現状では、西に進むにつれて通路と部屋を交互に有する構造になっており、天井はコンクリートで、壁はレンガでつくられている。床は場所によって差はあるものの全面に土砂が堆積している。通路は幅1.2ｍで奥に７ｍ進むと幅３ｍ、奥行４ｍの部屋

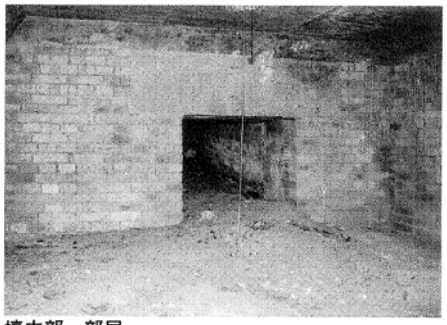


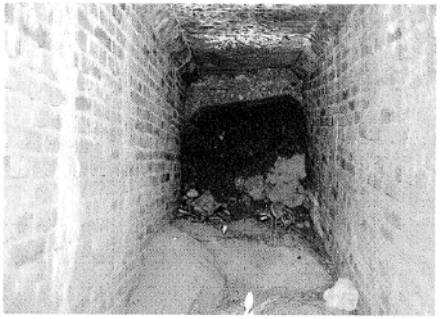
第 18 図　壕平面図及び断面図

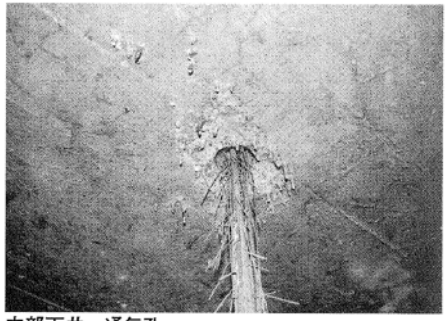
になっている。部屋には天井に２ヶ所の通気孔と幅60㎝の小さい横穴も確認できる。部屋から奥の通路を経てさらに規模の大きい部屋を有しているが、通路から土砂で埋没し、奥に進むことは出来ない。聞き取りによると埋没した大部屋には、かつて３基の発電機が設置されており、発電機の台座が大部屋に最近まで残っていたとのことである。

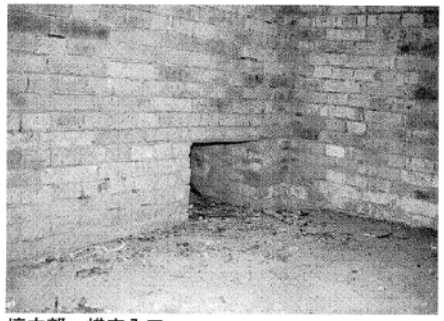
電波探知機壕遠景（南から）


壕内通路


壕内部　部屋

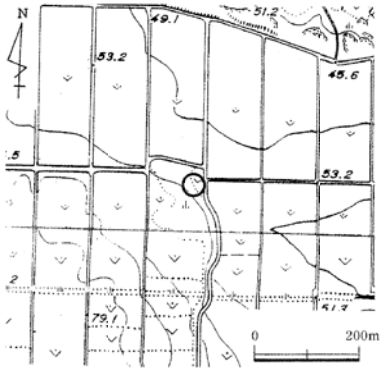

壕内部


内部天井　通気孔


壕内部　横穴入口

15.宮良牧中の避難壕

所在地：石垣市宮良牧中
立地（標高）：平地（約50ｍ）
形態：自然壕
種別：避難壕
現状：残存状況は良好
保存状況：林野内に放置
築造者：宮良住民、独立歩兵第298大隊
築造年月日：1943年（昭和18）頃
戦時中の使用状況：宮良住民の避難壕として利用
主な遺構：石段、土留め石積み

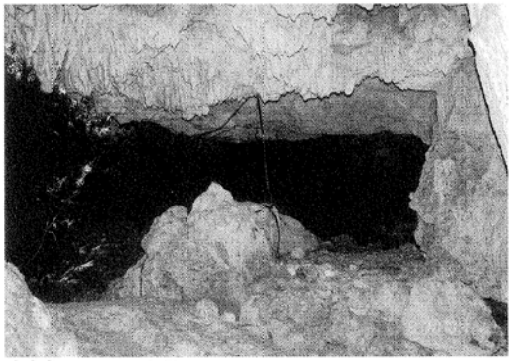


概　要

宮良集落の北方に位置する牧中地域の縁辺部は、東西に走る断崖に沿って自然洞穴がいくつも存在し、戦時中は宮良住民の避難壕として利用された。そのうちの一つであるナデーアボーは戦時中の避難壕として今回、初めて報告するものである。

ナデーアボーは小規模な陥没ドリーネの下部に東西２ヶ所の壕口を有する自然壕である。東側の壕は、入口から内部に下りる石段が設置されている。石段下は平坦に造成されており、造成部の周囲には土留めの石積みが見られる。聞き取りによると、1943年（昭和18）頃から宮良在住の老人が石段を構築し始め、翌年宮良牧中に駐屯した独立歩兵第298大隊（通称・毛木部隊）が壕を使用し、土留め石積みを構築したとのことである。西側の壕にはこうした加工痕は見られず、自然壕をそのまま利用していたことが窺われる。

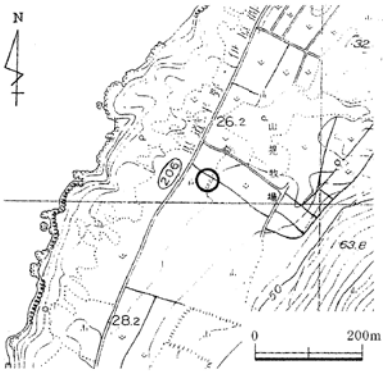
他に宮良住民の避難壕として使用された自然壕では、牧中地域の西方に位置するマギーアボーなどが挙げられる。ちなみに、方言で洞窟を意味する「アブ」は、宮良では「アボー」と言う。


壕内部から入口を見る

壕内部土留め石積

16.伊原間のサビチ洞

所在地：石垣市伊原間
立地（標高）：平地（約０ｍ～25ｍ）
形態：自然壕
種別：避難壕
現状：観光地化されている。
保存状況：観光用に整備され、旧地形も改変されている。
築造者：－
築造年月日：－
戦時中の使用状況：伊原間住民の避難壕として利用
主な遺構：壕

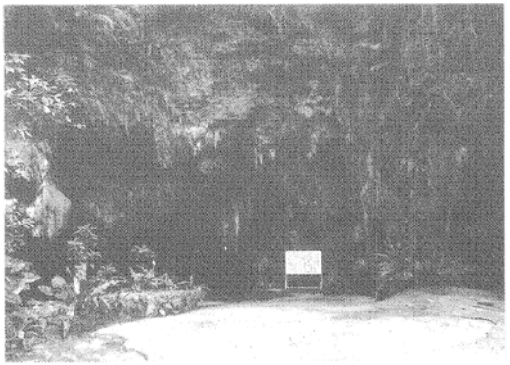


概　要

県道206号線を伊原間集落を超え平久保方面に向かうと右手には、沖縄戦時に、伊原間住民が避難したサビチ洞が所在する。石垣島内では比較的規模の大きい鍾乳洞で、現在は観光整備され、入口周辺は改変を受けている。内部も観光用の通路が設置されているもののそれ以外は旧状を保っており、自然壕の雰囲気はかなり留めている。洞内の全長は支洞を含めて324ｍで西方向に延び、県道の地下を通り西側の海岸に抜ける。

戦時中は伊原間集落も空襲を受け、住民は集落北方の自然壕に避難した。避難場所は当該の壕であるサビチ洞をはじめ、サビチ洞の北方に位置するミッチャ洞窟、イガイズ洞窟などに避難したが、その後、軍命により桴海に避難した。聞き取りによると、サビチ洞周辺は戦前から茅取り場として伊原間集落の住民が出入りしていたという。

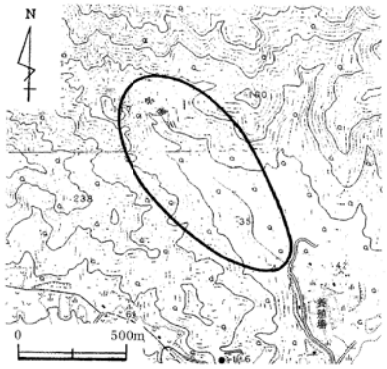
沖縄戦時、伊原間には独立歩兵第300大隊の分遣隊が駐屯し、現在の伊原間公民館東付近に茅葺の兵舎を構えていた。陣地は集落の西海岸に銃眼などがあったとのことであるが、戦後破壊されたといわれる。


サビチ洞入口

内部から入口を見る

17.白水の戦争遺跡群

所在地：石垣市白水
立地（標高）：山地（約50m～100m）
形態：人工壕、塹壕など
種別：奉護壕、行政、住民避難など
現状：残存状況は概ね良好
保存状況：山林内に放置
築造者：八重山支庁、独立自動車第284
　　中隊第１小隊
築造年月日：1944年（昭和19）
戦時中の使用状況：大川・登野城住民が
　　避難、御真影の安置等
主な遺構：壕、塹壕、かまど跡、井戸跡



概　要

名蔵平野の北東部に位置する白水地域の山中はかつて、旧日本軍が駐屯し、地元住民や、官公庁の避難場所でもあった。現在でも、名蔵川の支流であるシサミズィガーラを沿うように走る山道の周辺には、八重山支庁壕や御真影を奉護した壕、塹壕、井戸跡、かまど跡などが残っている。

山道に入って最も東側に位置する施設は井戸跡で、花崗岩の石積みで構築されている。白水に駐屯していた独立自動車第284中隊第１小隊（通称・中川部隊）が造った井戸であり、井戸の西側を部隊の駐屯地として利用していた。戦時中は慰安所も駐屯地内にあったといわれる。山道の周辺は平場が点在し、かつての避難所の様相を色濃く残している。登野城集落民の避難地で確認できた遺構はかまど跡が２ヶ所、タコ壷４ヶ所、L字型の塹壕、山道を補強する土留めの石積みであった。かまど跡には鉄鍋や陶器などの遺物が散乱している所もある。登野城集落民の避難地から更に北西側には大川集落民の避難地が設定された。ここも先の登野城集落民の避難地同様に平場が点在し、タコ壷22ヶ所、塹壕８ヶ所が確認できた。これらはかなり狭い範囲に密集しており、その形状も多様である。タコ壷、塹壕相互の配置に関しても規則性を窺うことができず、立地も平場もあれば緩斜面に配置されているものも見られる。このことから各々の用途については不明である。しかし、これだけのタコ壷、塹壕が一定箇所にまとまって見られるのは八重山地域では当該地を除いて見られないため、今後の戦時における避難生活を知る上で貴重な資料になるものと思われる。他にも周辺に鉄鍋や茶碗、ビール瓶の破片が散乱している。

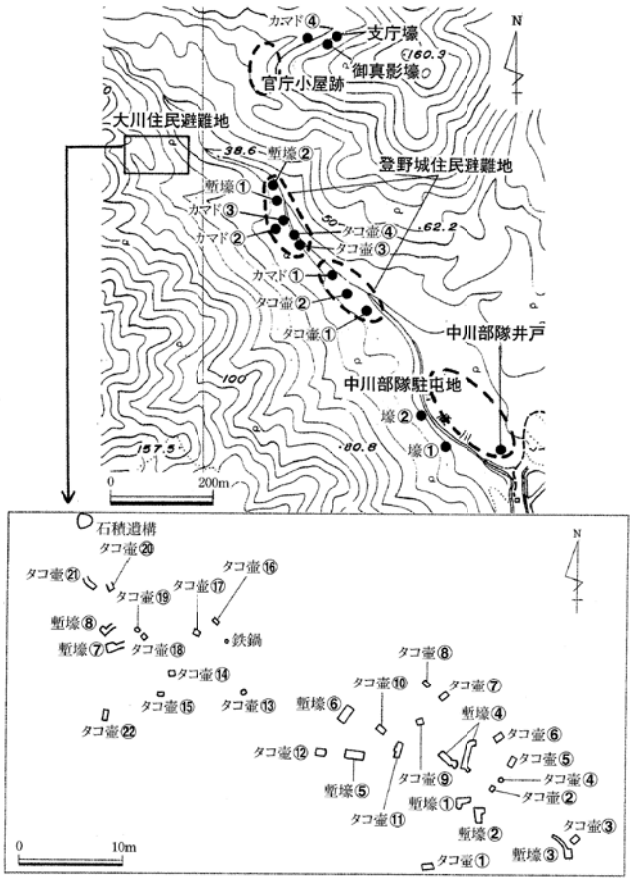
白水地域の遠景（南東から）

中川部隊井戸跡

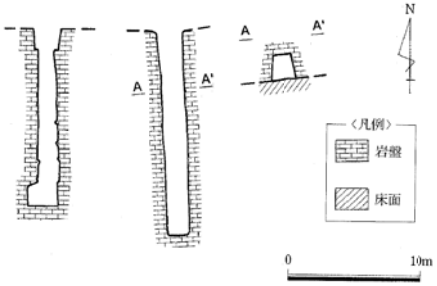
軍命により白水を避難場所に指定された集落は大川、登野城、川平の住民で、川沿いでかつ湿気の高い同地域はマラリアの発生地帯であったため、多くの住民がマラリアに罹患し、多数の死者を出している。

最も西側には、風化した花崗岩を掘り込んだ２ヶ所の壕がある。どちらも開口部が北向きで、八重山支庁壕、西に10m離れた場所に御真影奉護壕がある。八重山支庁壕は南北方向に一直線状に掘られており幅２m、高さ1.9m、奥行15mを測る。入口、内部は丁寧に掘削され、壁にははつり痕も見られる。御真影奉護壕は奥行13mで幅や高さは八重山支庁壕とほぼ同じだが、奥に小部屋を設置しており、壁に御真影を安置していたとされる棚状の掘り込みも確認できる。また側壁には部材痕が数ヶ所見られる。

八重山支庁が設置した当該の壕は1944年（昭和19）10月頃に完成、石垣、大浜、白保、竹富、小浜国民学校の御真影を安置した。白水では壕近くに小屋を建て、仮職員事務所を設置し、学校長や八重山支庁学務係が常直し御真影の奉護に勤めたが、終戦後各学校に返還され焼却された。



第19図　白水の戦争跡群配置図及び大川住民避難壕・タコ壺群配置図



第20図　左：御真影壕、右：八重山支庁壕

カマド跡①

カマド跡②

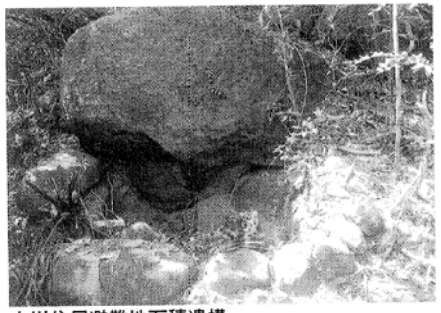
L字塹壕

壕②入口

八重山支庁壕入口

御真影壕入口

御真影壕内部　部材痕


大川住民避難地石積遺構

18.石垣島地方気象台の弾痕跡

所在地：石垣市登野城
立地（標高）：平地（約10ｍ）
形態：建造物
種別：その他
現状：外壁は老朽化が進んでいる。
保存状況：一部、修復箇所あり。
築造者：石垣島測候所
築造年月日：1896年（明治29）
戦時中の使用状況：－
主な遺構：外壁に残る弾痕跡

概　要

石垣島地方気象台は1896年（明治29）に中央気象台附属石垣島測候所として創立され、翌年現在地に移設してから100年以上の歴史を有する。気象台の敷地を囲う外壁には、戦時中の空襲で受けた銃弾痕が今も残っている。

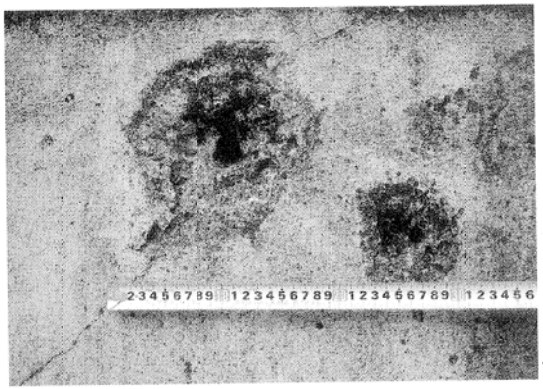
弾痕が見られる場所は気象台を囲う外壁の南側部分で、約120ｍの長さを測る。壁は外見から３種類に分けることができ、気象台設立当初からの壁（材質不明）と、外見の色が若干異なる２種類のコンクリートの壁が繋げられている。気象台の敷地内南側にある、気象台設立当初から建てられた発電所施設（現在は倉庫として利用）にも弾痕が３ヶ所見られる。また外壁の西側は近年まで気象台設立当初からの外壁が使用されており、弾痕も残っていたが、道路拡張のため外壁は改装され、以前の外壁より２ｍ東に移動した。しかし、地元住民の要請により以前の外壁（弾痕が残る）が幅２ｍのみ保存され、現在の外壁に組み込まれている。

『市民の戦時・戦後体験記録　第三集』（石垣市史編集室著　158頁）には、戦時中の石垣島測候所に関する記述が記載されており、一部要約すると、戦局が次第に激化の兆しをみせていた当時、測候所でも防空壕を設置することが急務とされていたため、勤務時間の余暇を利用して全員総出で壕掘り作業に従事していた。空襲が続く状況でも測候所では片時も業務を休むことは許されず、鉄かぶとを被

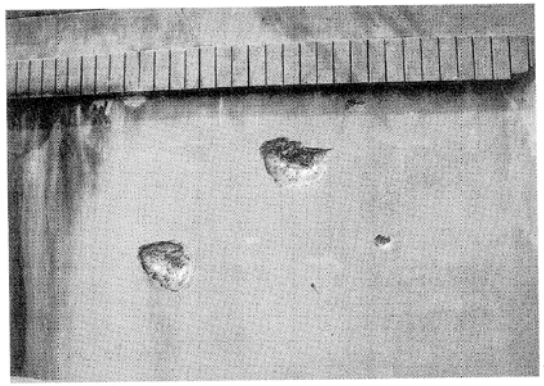
南壁近景（西から）

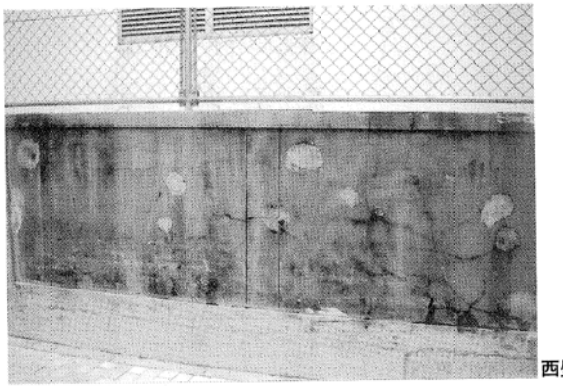
南壁弾痕跡

って業務を遂行した。やがて空襲は連日激しいものとなり、石垣島にも米軍が上陸してくると予想されたため、気象業務を山地で行うべく木造の観測小屋が設置されたとのことであるが、使用されることのないまま終戦を迎えたという。

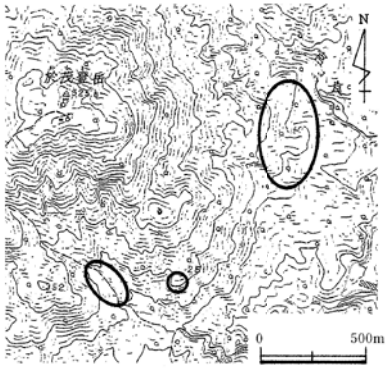


南壁弾痕


発電所跡（現倉庫）弾痕


西壁弾痕　保存箇所

19.於茂登岳の戦争遺跡群



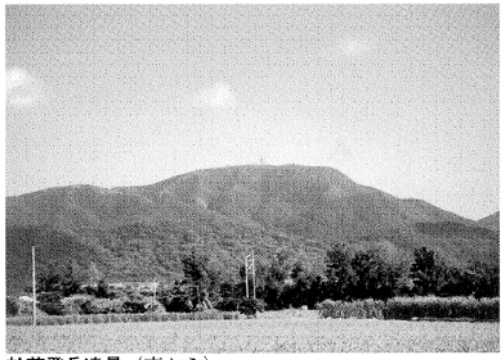
所在地：石垣市於茂登
立地（標高）：山地（約150m～200m）
形態：人工壕、構築物
種別：司令部跡、銃眼、陣地壕、病院壕
現状：残存状況は概ね良好
保存状況：於茂登岳内に放置。
築造者：独立混成第45旅団
築造年月日：1945年（昭和20）
戦時中の使用状況：旅団司令部、野戦病院
　　陣地として利用
主な遺構：壕、銃眼、司令部跡の石積み

概　要

石垣島の最高峰である於茂登岳一帯は山岳地形を利用した天然の要塞として持久、遊撃戦の拠点とされ、多数の陣地が構築された。1944年(昭和19) 8月に石垣島に配備された独立混成第45旅団は戦局悪化に伴い、石垣島にも米軍の上陸が予想されるとして1945年（昭和20）6月10日甲号戦備を発令し、旅団司令部を於茂登岳山中に移動した。また、於茂登岳の東側山腹には守備隊最終終結陣地として野戦病院用の壕や銃眼、石積みの住居跡などが分布している。

深い山林に広範囲に現存する於茂登岳の戦争遺跡は、時間的な制限もあり全容を把握することはできなかったが、そのなかでも旅団司令部跡と通信隊基地跡、野戦病院壕を主として、今回報告する。

旅団司令部跡は於茂登岳の山頂まで続く登山道沿いに位置する。兵舎跡といわれる花崗岩の石積みが一部「コ」字状に、石積みの南側に石段がそれぞれ残存してはいるが、崩壊が著しく、当時の全形を窺い知ることはできない。石積みの周辺には赤瓦も大量に散乱している。これは旅団司令部を当該地域に構築する際、以前旅団司令部が設置されていた八重山農学校や八重山高等女学校（現・八重山高校）の建物を解体し、司令部の建築部材として運ばれたものである。司令部跡の東側には南北に走る小さな谷があり、谷の斜面には

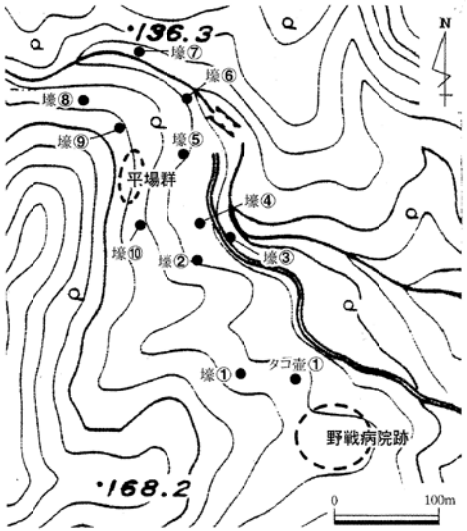

於茂登岳遠景（南から）

旅団司令部跡石積

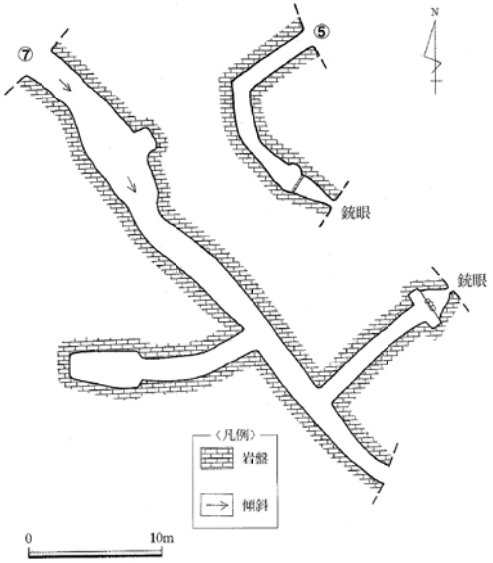
2ヶ所の壕が向かい合うように掘られている。この旅団司令部跡から北東に約300mの位置に通信隊基地跡の石積みが現在も見ることができる。残存状況は良好で平面形がL字状となる土留めとしての石積みが長さ約11m、高さは最高2.1m残る。石材は花崗岩の自然石を利用しており、ほとんど崩れは見られない。通信隊基地の施設があったと思われる平場は約9m×6mで建物基礎等は見ることはできない。

於茂登岳の東側山腹は先述した野戦病院壕や銃眼など多数の陣地が構築されているが、深い山林に覆われているため、当該地に辿り着くのは困難である。野戦病院壕は山腹に多数展開する陣地の一つで、風化した花崗岩に掘り込まれている。壕は北向き、南西向きの2ヶ所開口部を有し、通路が貫通している。通路は幅0.9m～1.6m、高さ1.4m～2.0m、天井はアーチ状で概ね丁寧につくられている。南北に進む通路からは西向きに掘られた小部屋を5ヶ所有している。小部屋はいずれも丁寧に構築され、壁面に部材痕や煤が付着した灯り取り、炭化した木片が散乱している場所も見られる。小部屋が並ぶ通路の反対側には2ヶ所の出入口をもつ長方形の大部屋を有している。大部屋の内部は粗加工で、天井が一部崩落している。大きさは南北に18m、東西に最大6mを測る。またこの他にも垂直L字型壕、弾薬庫壕と思われる、奥行2mの小規模な壕、壕の前に塹壕を配する壕が各1基、銃眼を1ヶ所のみ配した壕が2基、タコ壺が1基確認された。

今回、於茂登岳の東側山腹を調査して野戦病院壕を含む4基の壕、銃眼が3ヶ所、兵舎跡の石積み、壕の通気孔、塹壕などが見られたが、調査に同行して頂いた石垣市教育委員会の大田静男、松島昭司両氏によると東側山腹一帯には大小10数本の壕や、銃眼が点在しているとのことである。

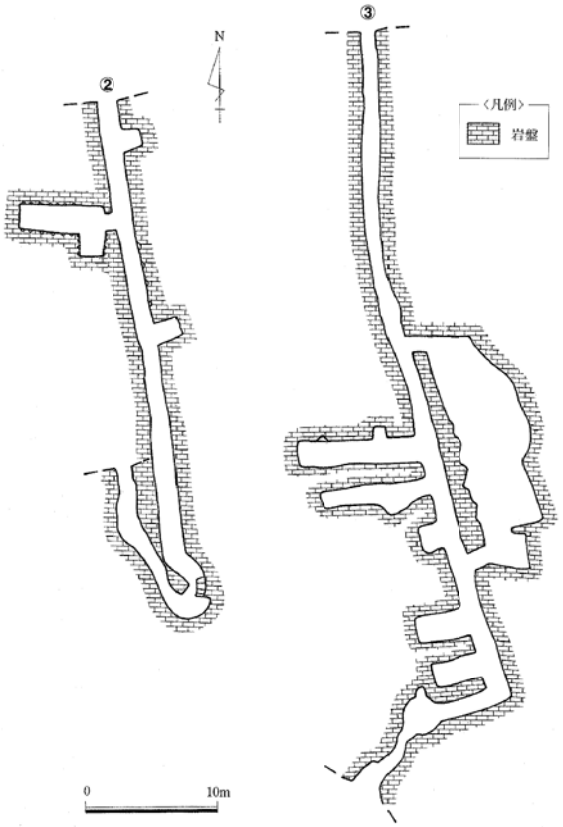


第21図　於茂登岳東麓の戦争遺跡群配置図

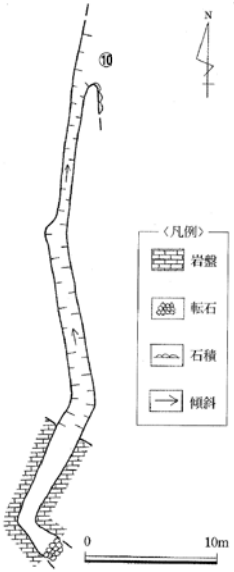


第22図　壕平面図

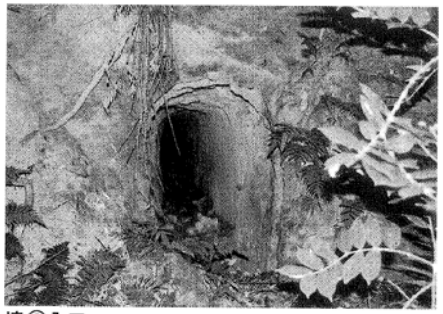
因みに、於茂登岳東南麓には日本軍の守備隊・田所隊が八重山中学校（現・石垣中学校）の生徒を動員して建立したといわれる八重山神社跡がある。国威高揚のために1945年（昭和20）6月に司令部各施設の背後に相当する場所に建立され、終戦直後には戦没者勇士合同慰霊祭も執り行われている。かなり広範囲に平場を造っており、木製の本殿はすでに朽ちているが、縦横160cm×180cmの本殿基壇跡や石段、参道跡が見られる。

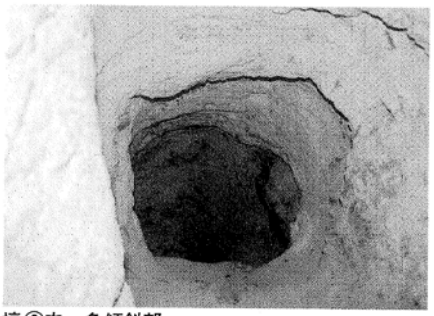


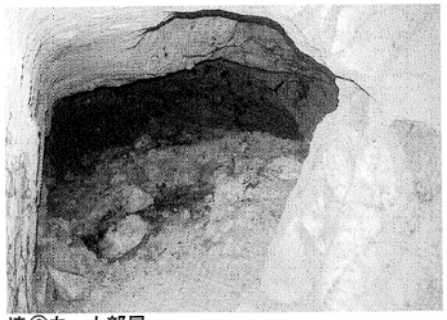
第23図　壕平面図



第24図　壕平面図


壕②入口

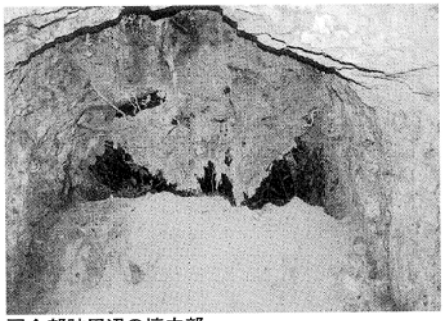

壕②内　急傾斜部



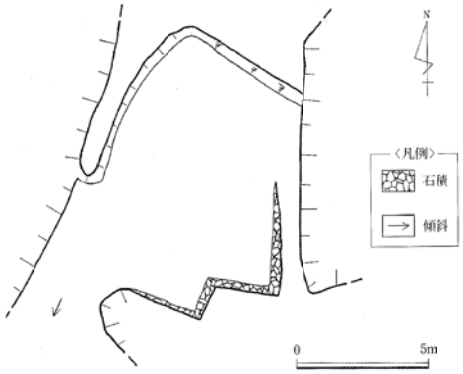
壕③内　大部屋

壕⑤銃眼

壕⑩（壕入口と塹壕）



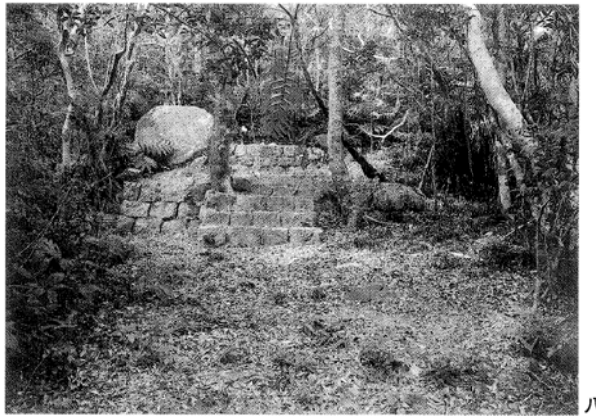
司令部跡周辺の壕内部



第 25 図　通信隊基地跡平面図

通信隊基地南側石積

司令部跡　瓦散乱状況



八重山神社　本殿跡

八重山神社　参道跡

20.登野城小学校の奉安殿

所在地：石垣市登野城
立地（標高）：平地（約10m）
形態：建造物
種別：その他
現状：比較的良好。
保存状況：登野城小学校内に保存
築造者：不明（登野城国民学校が委託）
築造年月日：1931年（昭和６）２月21日着工
戦時中の使用状況：御真影を安置
主な遺構：コンクリート造りの建造物

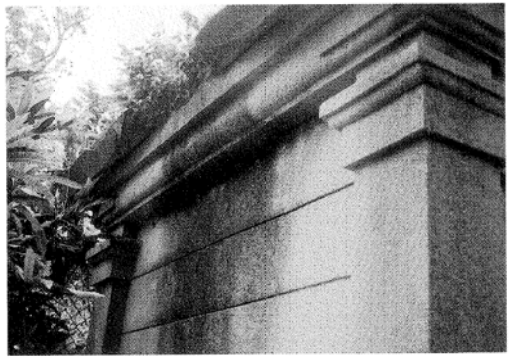
概　要

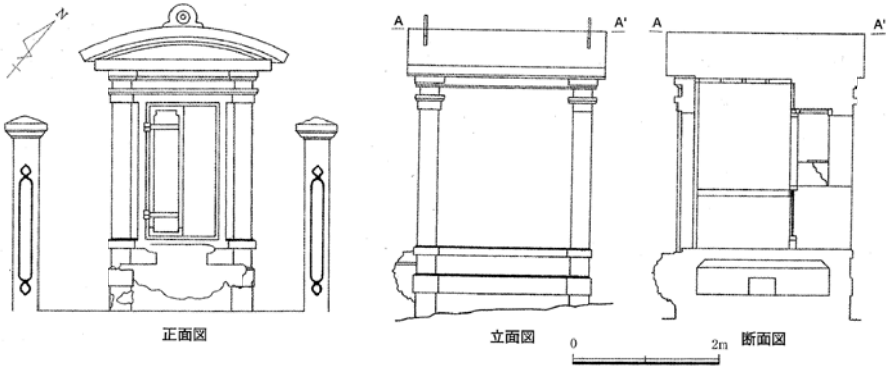
登野城小学校の正門左側には、旧登野城国民学校の奉安殿が現在も残る。奉安殿はコンクリート製で、表面を洗い出しにより仕上げられている。また、屋根はアーチ状に作られている。鉄製の扉は錆が進行しているが、開けることができ、内部は御真影を安置する木製の棚などがそのまま残る。奉安殿に隣接して当時の校門が残っており、「明治廿七年甲午一月建立」「沖縄海運會社」の銘が刻まれている。なお、奉安殿と校門は校舎新築に伴い、現在の場所に移転している。

奉安殿は天皇の御真影（写真）と、天皇の考えを示した文書である教育勅語謄本を安置する建物で、1891年（明治24）に学校内の一定の場所に設けるよう法制化された。旧登野城国民学校には1931年（昭和６）２月21日に奉安殿工事が着工し、同年12月28日、御真影奉遷式が挙行された。戦時中、児童、職員は登下校の際には奉安殿に向かい最敬礼をするのが常となっていた。また、国家行事の祝祭日が学校行事として義務付けられ、奉安殿の警護を学校職員が交代制で昼夜問わずに当たっていた。

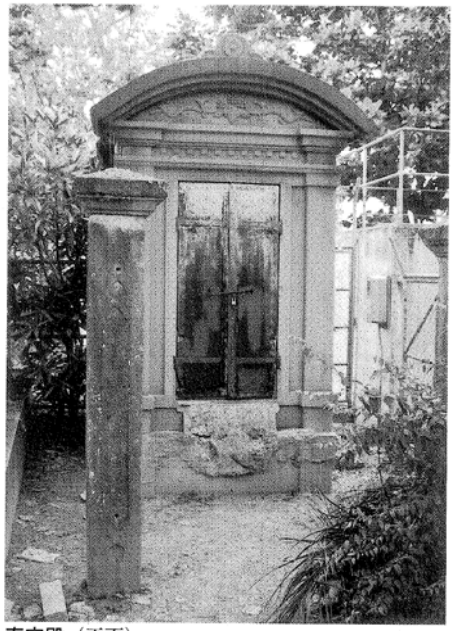
県内に現存する奉安殿は当該の他に、沖縄本島の本部町謝花にある謝花国民学校の奉安殿と、沖縄市美里にある美里国民学校の奉安殿の２ヶ所であり、いずれも当センターが作成した『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査』中部編、北部編により報告されている。

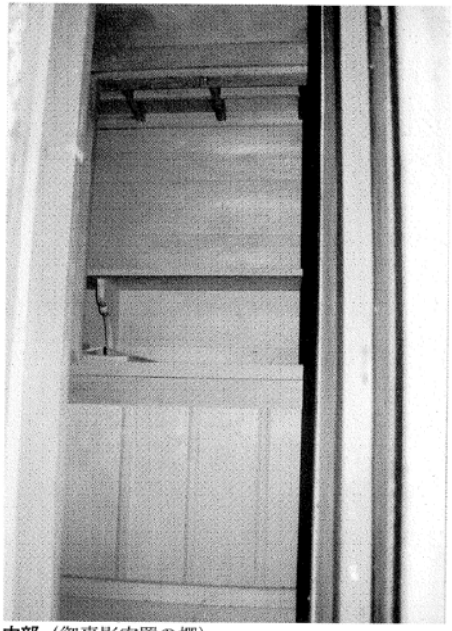
奉安殿（南東から）


側面（屋根一部欠落）

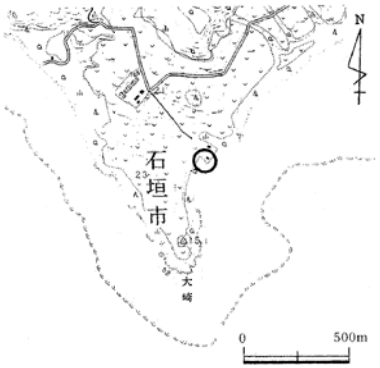


第 26 図　登野城小学校の奉安殿［『沖縄県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書』より再トレース］


奉安殿（正面）


内部（御真影安置の棚）

21.崎枝の電信屋



所在地：石垣市崎枝
立地（標高）：平地（約10ｍ）
形態：構築物
種別：その他
現状：塩害による老朽化が進む
保存状況：1986年（昭和61）石垣市指定文化財に指定
築造者：旧陸軍省
築造年月日：1897年（明治30）７月１日完成
戦時中の使用状況：海底電線の中継地
主な遺構：建物、塀に弾痕

概　要

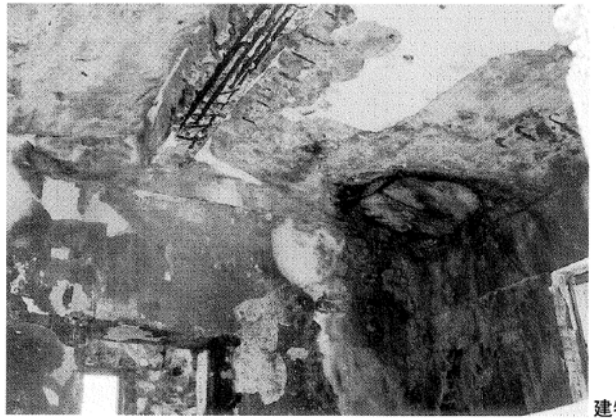
崎枝半島のほぼ南端に位置する海岸沿いに約半世紀にわたって日本本土や沖縄本島、台湾間の通信に利用された海底電信陸揚げ室（通称・電信屋）の建物跡が現存する。電信屋は鉄筋コンクリート造りで、壁はレンガ積みに漆喰とセメントで上塗りされているが、戦時中の機銃掃射による弾痕により、壁の内部にあるレンガが剥き出しになっている。屋根は緩い傾斜の切妻で内部から見ると、内部は老朽化によるコンクリートの落下で鉄筋が剥き出しになっている。建物の南側（海岸側）には、防護のための石積みが施されている。電信屋は旧陸軍省が日清戦争後、日本の領有となった台湾の監視と、植民地政策を進めるための軍事上の目的から、1897年（明治30）７月１日当該地域に海底電信陸揚げ室を建設、完成した。それにより、海底電線の中継地として日本本土から台湾までの通信回線が開通した。電信屋は太平洋戦争時に、米英軍の攻撃目標となり、1945年（昭和20）に焼失することとなった。

1985年（昭和60）にそれまで電信屋を管理していた日本電電公社が民営化に移行するのに伴い、石垣市に寄贈。翌年には石垣市指定文化財に指定された。現在では市民の文化財めぐりや、戦跡学習に利用されている。

電信屋（正面）

裏側　弾痕

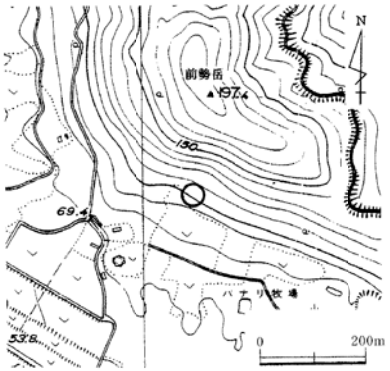
建物内部　トイレ跡


建物内部天井　鉄筋露出状況

建物南側　防護石積

22.前勢岳南麓の砲台跡

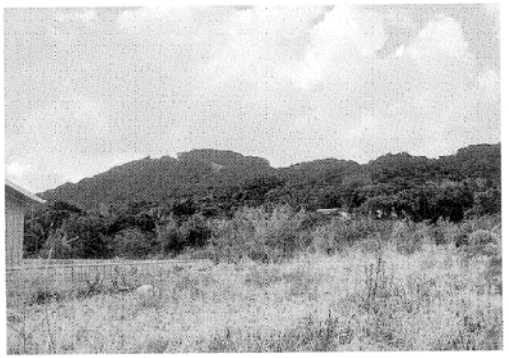
所在地：石垣市新川
立地（標高）：山麓（約100m）
形態：構築物
種別：砲台
現状：砲台周辺の石積みが残る。
保存状況：前勢岳南麓に放置
築造者：独立機関銃第19大隊
築造年月日：1944年（昭和19）10月以降
戦時中の使用状況：15cmカノン砲を設置
主な遺構：砲台周辺の石積み



概　要

石垣島の南西部に位置する前勢岳、その南麓となる斜面地に戦時中、独立機関銃第19大隊が15cmカノン砲を設置していた。現在、残存しているのは砲台跡周辺に高さ0.5m～1mの石積みが点在している。石積みはチャートを利用しており、目地にはコンクリートを流し込んで補強している。部分的に残存状況が良好なところも見られるが、崩壊し、石が散乱している箇所が目立つ。石積みから北方向に、逆「L」字状の一見、塹壕のような大きな窪みが見られるが、窪みの先端部は略方形になっており、おそらくその部分が砲台跡に相当するものと考えられる。掘り込みの規模は約10m×5mで擂鉢状に落ち込む。現在、砲台跡のすぐ南側は牧場が広がり、東方約500mの位置には、沖縄県石垣少年自然の家が建てられている。

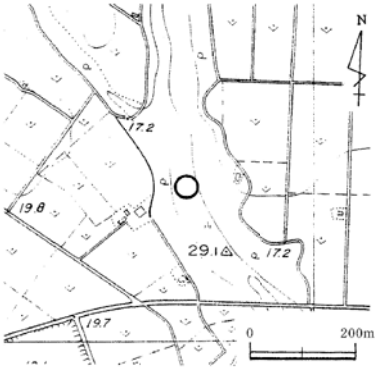
当該地域に15cmカノン砲を設置した独立機関銃第19大隊（大隊長・小島誠大尉）は、『先島群島作戦』によると、「1944年（昭和19）8月15日山形市に於て編成完結、同年10月頃、石垣島に上陸、独立混成第45旅団の指揮下に入る」とある。15cmカノン砲は市街地に向け備え付けられたが、戦後、米軍によって破壊されてしまったとのことである。現在は雑木が繁茂しているため遠望することはできないが、かつては石垣市街地を南側に望むことができ、砲台設置箇所として好条件であったことが容易に想像できる。


遠景（南東から）

高射砲跡周辺石積

23.大浜ナーカーラの壕

所在地：石垣市大浜
立地（標高）：平地（約10m）
形態：人工壕
種別：陣地壕
現状：残存状況は良好
保存状況：磯辺川沿いに放置
築造者：海軍巌部隊
築造年月日：1944年（昭和19）10月以降
戦時中の使用状況：陣地として利用
主な遺構：壕、爆風除けの石積み

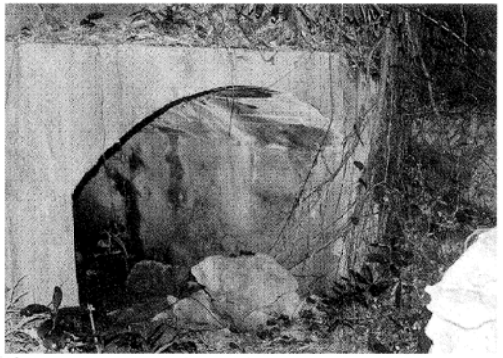


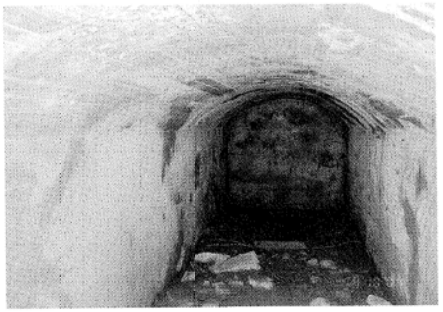
概　要

石垣島最大の河川である宮良川、その西方には小規模な磯辺川も流れているが、その上流沿いには戦時中、海軍巌部隊が構築したといわれる大浜ナーカーラの壕が現存する。壕はコンクリート製で、北東方向に開口する。開口部付近に土砂が流れ込んでいるが、崩落も見られず、残存状況は良好である。幅2.3m、高さ2.1m、奥行9.3mをそれぞれ測る。内部には、床面には土砂がやや堆積するが、コンクリート製の土台（用途不明）を2ヶ所見ることができる。アーチ状の天井には、開口部から5mの地点には縦30cm、横50cm、奥行90cmの通気孔があり、外部からも見ることができる。壕の開口部前には、爆風除けの石積みが見ることができる。石灰岩を利用し、表面だけセメントを流し込んでいる。石積みは高さ約1.8m、幅は最大で1.6mで、爆風除けの外側は開口部前からカーブしながら西方向へ約5mに亘って構築されている。さらに、爆風除けの内側（壕の開口部側）にはコンクリート造りの階段が7段設置されている。

当該の壕を構築したといわれる海軍巌部隊は佐世保鎮守府管下で編成された佐世保航空隊石垣島派遣隊のことで、巌部隊と呼称された。基地の警備、燃料弾薬の集積補給、発着機の整備、誘導が主要業務であった。

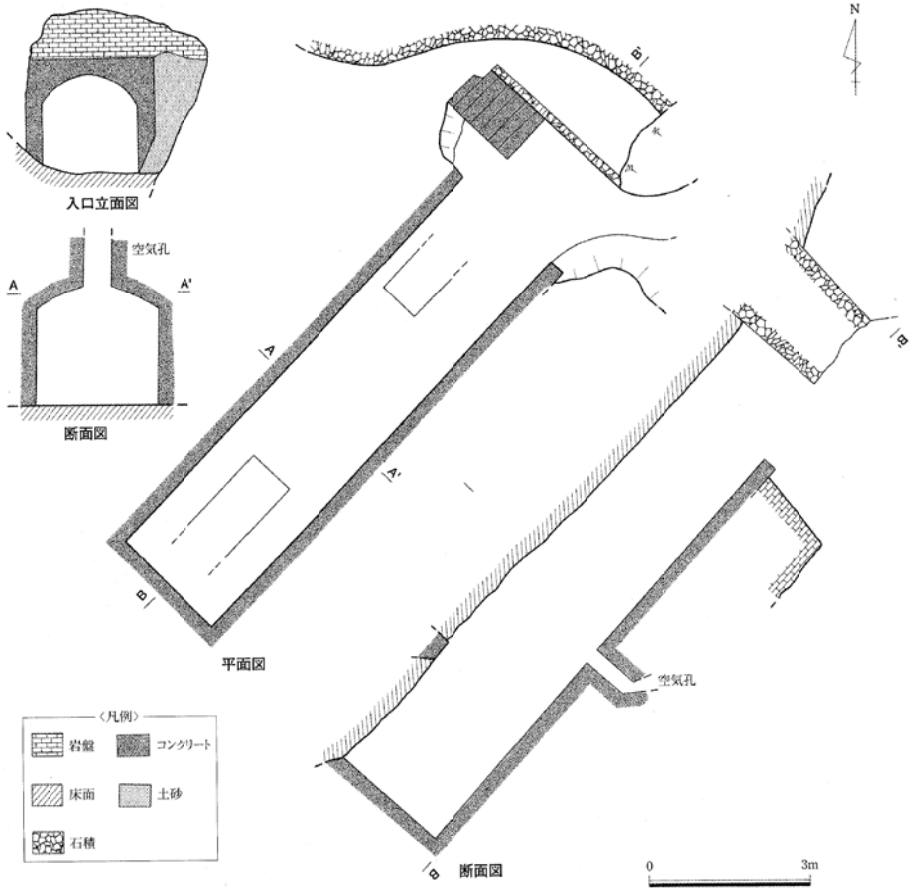
遠景（西東から）


壕入口



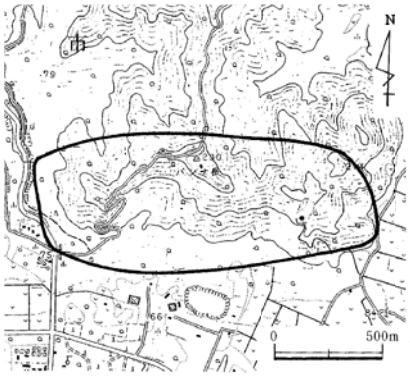
壕内部

壕入口前（階段と石積）



第27図　大浜ナーカーラの壕

24.バンナ岳の戦争遺跡群



所在地：石垣市大川、石垣
立地（標高）：山地（約70m～230m）
形態：人工壕、塹壕、タコ壺
種別：陣地壕
現状：残存状況は良好
保存状況：バンナ岳に放置
築造者：石垣島海軍警備隊、独立歩兵第271大隊、陸軍特設第4警戒隊
築造年月日：1944年（昭和19）
戦時中の使用状況：陣地
主な遺構：壕、爆風除けの石積み、塹壕、タコ壺など

概　要

石垣市街地の北方約4㎞に位置するバンナ岳一帯は現在、県営バンナ公園として知られているが、沖縄戦時には多種多様な陣地が構築された地域でもある。その中で今回報告する戦争遺跡は4ヶ所で、陣地を構築した部隊もそれぞれ異なるが、広大な範囲に点在するこれらの戦争遺跡をバンナ岳の戦争遺跡群として、今回報告することとする。

バンナ岳の南麓、現在の八重守の塔の東方に位置する松林内にはタコ壺、塹壕がそれぞれ3ヶ所確認できた。塹壕は長いもので約20m、幅は平均約2m、深さは約0.5m～1m程である。タコ壺は直径約90㎝～120㎝、深さは約50㎝である。これらの塹壕、タコ壺の付近には戦時中、使用されていた井戸跡があったとのことだが、今回確認することはできなかった。

バンナ岳の西麓、県道石垣・浅田線（208号線）の東側に位置する山林内にコンクリート製の壕の開口部が現在も残る。壕は平面形で逆「U」字状の壁面に2ヶ所開口させている。南向きと西向きにそれぞれ開口するが、内部は殆ど埋没している。また、開口部から上の壁面は、庇をつくっているのも特徴である。この壕が立地する斜面の山を越えた反対側（北側）斜面には、爆風除けの石積みが見られる。爆風除けは石灰岩にコンクリートを繋げて構

南麓タコ壺・塹壕群遠景（北西から）

南麓の塹壕

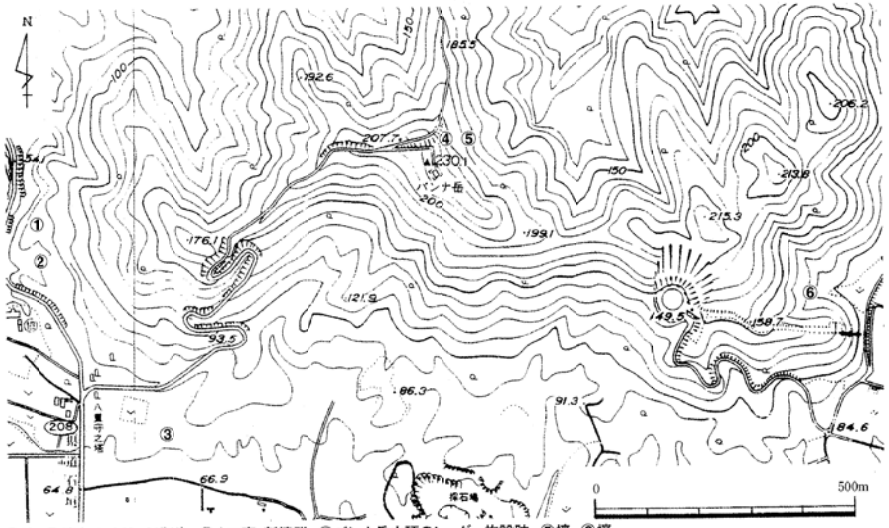
築、平面形で逆「L」字状につくられている。

バンナ岳南麓を戦時中、駐屯区域にしていた部隊は独立歩兵第271大隊で、先述した南麓のタコ壺・塹壕は同大隊が、また西麓の壕もタコ壺・塹壕がある地域から約500mしか離れていないため、同部隊が構築した可能性が考えられる。

標高230mのバンナ岳頂上付近の山林には、素掘りの壕が2ヶ所見られる。壕は脆い岩盤（粘板岩か）に掘り込まれており、2ヶ所とも東に開口する。壕①は幅2.4m、高さ1.7m、奥行は約2mをそれぞれ測る。壕②は平面形でL字状に掘られており、天井は三角形状につくられている。総延長は約8.2mである。内部は崩落した土砂が堆積しているが、床面にはコンクリート製の土台が2ヶ所設置されているのが確認できた。また、壁面には部材痕も見ることができる。戦時中、バンナ岳頂上にはレーダー施設が構築されており、当該の壕はそれに伴う施設と考えられる。

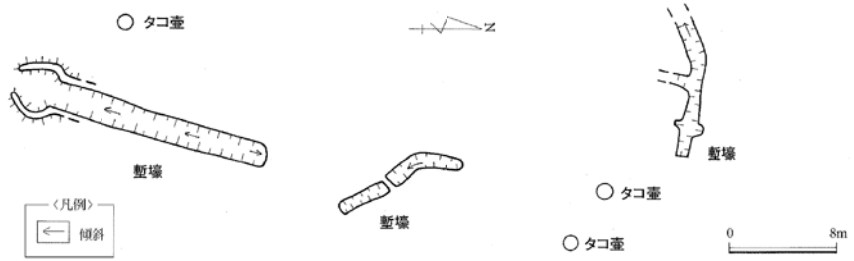
バンナ岳東麓に位置する山林には戦時中、石垣島海軍警備隊が構築した壕が現在も残る。壕は下部に川が流れる谷の南側斜面に掘られており、開口部は土砂で半分ほど埋まっている。内部の加工は概ね粗いが、比較的残存状況は良好である。壕は一直線状に掘られ、幅、高さともに1.8m、奥行は約10mを測る。壕の周辺には、戦前のビール瓶などの遺物が散乱している。この海軍警備隊が構築した壕は3ヶ所あるとのことで踏査を行ったが、確認できたのは先述した1ヶ所のみであった。

上記した4ヶ所の戦争遺跡の他にも、バンナ岳一帯には事前に確認、報告されている戦争遺跡があるが、限られた期間内の調査であったため、本報告で調査、報告することはできなかった。また、バンナ岳一帯はバンナスカイライン（道路）や鉄塔設置などで人工整備されている箇所はあるものの、大部分が山林として戦時中と変わらない状況であることから、今後、新たな戦争遺跡が確認されていく可能性が考えられる。



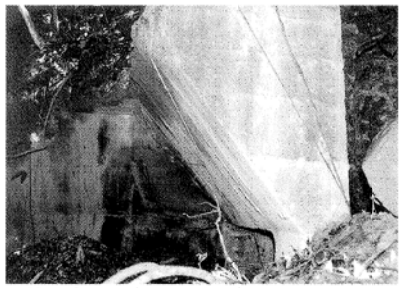
①壕、②壕（コンクリート造り）、③タコ壺・塹壕群、④バンナ岳山頂のレーダー施設跡、⑤壕、⑥壕

第28図　バンナ岳の戦争遺跡群配置図



第29図　③タコ壺・塹壕群平面図

西麓の壕（コンクリート製）入口



西麓の壕入口（ひさし部分）

バンナ岳頂上付近の壕　壕内部

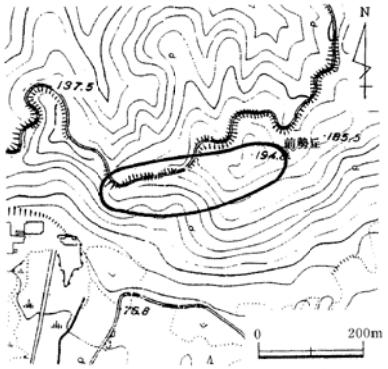
西麓の壕周辺石積（爆風除け）

東麓海軍警備隊壕入口

警備隊壕周辺散布遺物

25.前勢岳の壕・塹壕

所在地：石垣市新川
立地（標高）：山地（約140m～190m）
形態：人工壕
種別：陣地壕・塹壕
現状：壕は入口が一部崩落、塹壕は僅かに埋没している
保存状況：前勢岳南麓に所在する石垣島少年自然の家の敷地内に放置
築造者：不明
築造年月日：1944年（昭和19）頃
戦時中の使用状況：陣地として利用
主な遺構：壕、塹壕



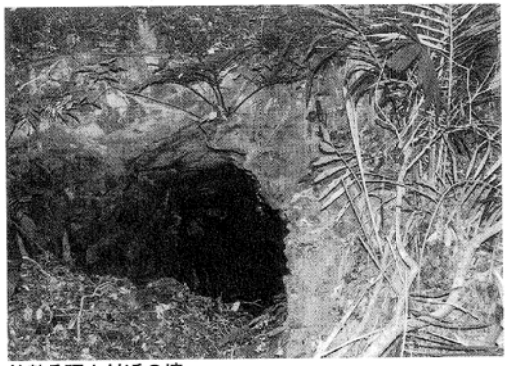
概　要

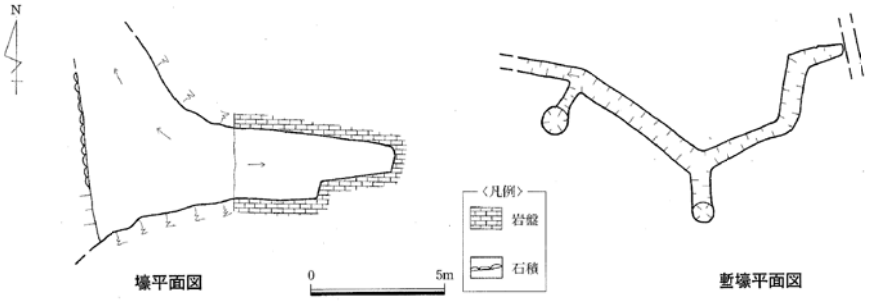
前勢岳の南麓、頂上近くに壕と塹壕がそれぞれ１基づつ残存している。現在は石垣島少年自然の家のハイキングコースになっており、山道に接しているので容易に確認することができる。壕は岩盤を掘り込んで構築しており、幅1.7m、奥行4.4m、高さは２mを測る。壕口は西側を向いており、脆い岩盤のため壕口の一部が崩落している。天井及び壁はやや丁寧に削っており、床面も平坦である。

塹壕は上記の壕の北東側に近接して配置されており、長さは15mを測る。地山を掘り込んでおり、幅は人一人通れる程しかない。一部、埋没しているものの、全体的に残存状況は良好であるため、全体の形状は窺い知ることができる。両端はタコ壺状の窪みが見られることから、形態的には２つのタコ壺を結ぶようにして塹壕が掘られているように見える。前勢岳の北側から南側に伸びる小尾根が途切れる部分に配置されており、地形的には尾根が戦略上の焦点になっていることが解る。

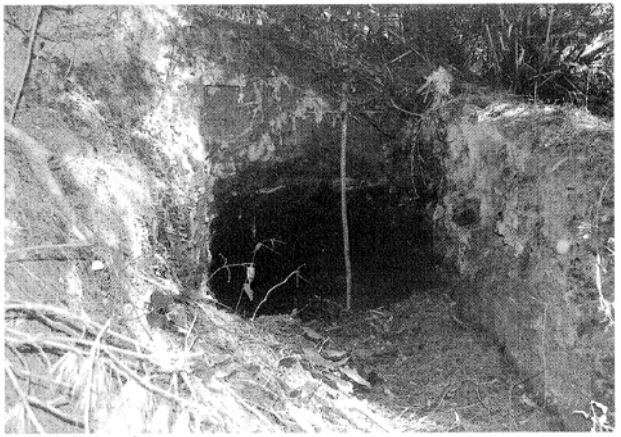
これらの壕･塹壕の配置から前勢岳を中心とする防衛体制が敷かれていたことを読み取ることができ、今後における更なる調査でその具体像が明確になってくる可能性は高い。

前勢岳遠景（南東から）


前勢岳頂上付近の壕



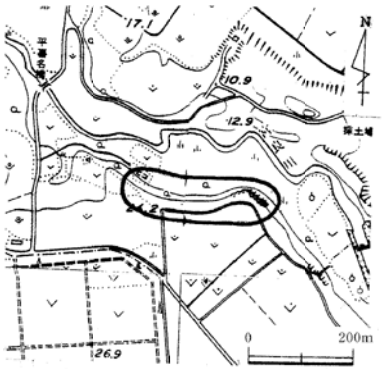
第 30 図　前勢岳の壕・塹壕


前勢岳南麓の壕

前勢岳南麓の塹壕

26.ヘーギナー壕・三連結壕

所在地：石垣市真栄里
立地（標高）：平地（10m～30m）
形態：人工壕
種別：陣地壕
現状：ヘーギナー壕は壕口部分が埋没しており、内部への侵入は不可能、三連結壕はほぼ完全な形で残存する
保存状況：原野内に放置
築造者：佐世保航空隊石垣島派遣隊
築造年月日：1944年（昭和19）頃
戦時中の使用状況：電波探知機、発電機を設置
主な遺構：コンクリートで構築した壕、発電機の設置台、壕口前の石積み



概　要

宮良川上流の南側崖面に石垣島でも最大規模を有する壕が２基掘り込まれている。かつての平喜名飛行場跡から北東へ約200ｍに２基の壕が隣接して配置されている。現在は周辺は畑地と荒蕪地となっており、畑地から荒蕪地へ下る斜面途中にヘーギナー壕、斜面を下りきった原野内に三連結壕の壕口が北側に向けて開いているのが解る。

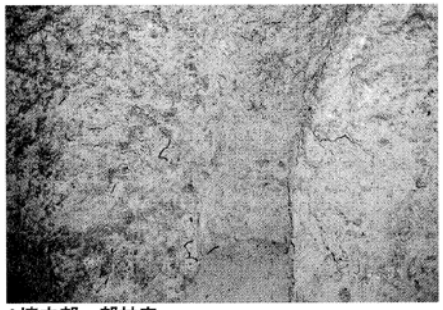
三連結壕は先述した研究センターの北東を流れる宮良川上流沿いに位置する。先述したように三本の壕を連結した壕で、石灰岩を素掘りで掘り込んだ壕（A壕）とコンクリートで構築した壕（C壕）、素掘りとコンクリートを併用している壕（B壕）に分類される。三本の壕口は全て北向きで、総延長は約120ｍを測る。A壕からB壕に繋がる素掘りの部分は全体的に粗加工だが、壁面の部材痕は丁寧なつくりとなっている。内部にはガラス瓶、木片が散乱しており、小石もかなり床面に落ちている。一方、B壕からC壕に繋がるコンクリートの部分は、天井をアーチ状に構築し、発電機を設置したコンクリートの台座が２基残る。また、床面もコンクリート貼りになっている。B壕の入口前には鍵型に石積みを配置した爆風除けが見られる。３ヶ所ある壕口の前には爆風除けの石積みが見られ、進入路は鍵形に屈曲させているのが解る。特に崩落、改変等は見られず、残存状況は極めて良好である。

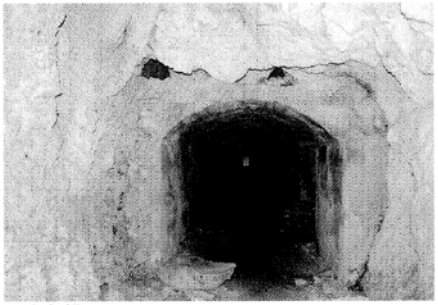
三連結壕遠景（西から）

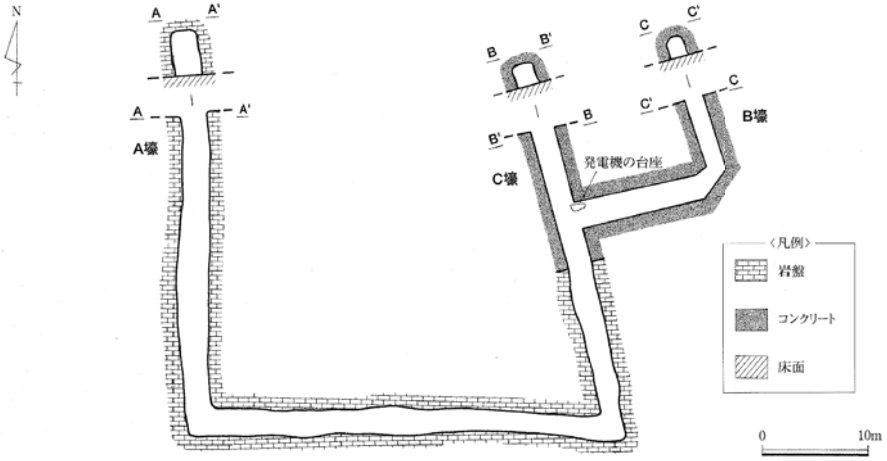
A壕入口

上記の三連結壕の西側には、観音寺部隊が使用した石垣島内で最大といわれるヘーギナー壕が存在する。石灰岩に掘り込まれており、最近まで内部に入ることができたが現在は落盤箇所が多く、入口が石灰岩塊で塞がっているため、入口の現状を確認するに留まった。石垣市教育委員会の大田静男氏によると内部は広く、東西約150ｍで床面から天井までは約３ｍを測るとのことである。

これらの壕の構築作業は、平喜名飛行場の建設の際に連れてこられた朝鮮人をはじめ平得地区の住民も徴用されたという。聞き取り調査では壕掘りの作業は主にツルハシによる掘削作業が行われ、昼夜交代制で軍の監視下で進められたとのことである。


A壕内部　部材痕


C壕内部



第 31 図　三連結壕の平面図及び断面図（『八重山の戦争』より再トレース）